浪華人物誌 巻一

281.63
0469n

岡本撫山著

浪華人物誌 巻一

執蒐苑叢書

281.63 0469n

浪華人物誌卷一目次

書家

筒井白雲子　一　福住如松子　一　富島瑞峰　一
永井如瓶　二　山本文龍　二　菊川　三
道山　三　戸田玄泉堂　三　大藏勘解由　三
長松友松　三　秦竹探　四　東竹堂　四
佐々木專林　五　新興蒙所　五　牧夏嶽　六
泉必東　七　尾崎南龍　七　僧佚山　七
巽眞漁　八　渡邊頑石　八　岳玉淵　九
澤井穿石　九　井村圭屑　一〇　福住如松子　一一
櫻井新助　一一　關世美　一一　牟岐述齋　一一

336150

名和八郎　一二　奥田子般　一二　藤井樗亭　一二
森川竹窓　一三　浦西可亭　一四　竹村雪啓　一四
武村松軒　一四　筒井尚堂　一四　竹原澧水　一四
長雄旭雲　一五　藤野一郎　一五

儒家

一井鳳梧　一五　鳥山芝軒　一六　鳥山香軒　一七
五井持軒　一八　五井蘭洲　二〇　中江岷山　二二
三宅石菴　二三　富永仲基　二五　木戸由巳　二六
倉鉢魯石　二六　上月專菴　二六　中井甃菴　二七
中井竹山　二九　中井蕉園　三四　中井履軒　三二
阮東郭　三九　菅甘谷　四〇　橋本樂郊　四〇
萱野考澗　四一　萱野錢塘　四三　井狩雪溪　四三

留守退藏　四四　穂積能改齋　四五　片山北海　四六
鳥山崧岳　四八　田中鳴門　四九　河野恕齋　五〇
葛蠡菴　五三　小山伯鳳　五六　左子岳　五七
岡魯菴　五七　加藤圓齋　五九　隱岐子遠　五九
平壽王　六〇　飯岡義齋　六一　早野仰齋　六三
早理反堂　六四　林淡齋　六四　細合斗南　六四
同張菴　六六　福承明　六六　西村孟清　六七
井坂雲卿　六七　岡田君章　六八　赤松春菴　六八
越智高洲　六九　山口剛齋　七〇　平賀中南　七一
高安蘆屋　七二　湖山南濤　七二　牛尾旗峰　七二
岡芸臺　七三　内山栗齋　七三　岸畑季英　七四
武谷泉　七四　早苗三寧　七五　鈴木格　七五

田中遜之　七五　友淵宜卿　七六　倉温　七六
原含　七七　楢林榮廸　七七　田早胤　七七
石文瑩　七八　菱川岡山　七八　片岡子蘭　七八
藤田恭菴　七九　原斗南　七九　由良箕山　七九
岡島龍湖　八〇　都賀庭鐘　八〇　十時梅厓　八〇
奥田拙古　八三　桂田龍山　八四　篠崎三島　八四
篠崎小竹　八六　篠崎竹陰　八八　劉琴溪　八八
武内確齋　八九　三村崑山　九〇　齋藤鑾江　九一
渡邊長城　九二　春田横塘　九二　春田壺處　九三
兼康百濟　九三　廣瀨筑梁　九四　八木巽處　九四
藪鶴堂　九五　藪長水　九五　香川琴橋　九五
佐々原梅操　九六　奥野小山　九八　山口陸齋　九八
後藤松陰　九九　藤澤東畡　一〇〇　橋本香坡　一〇一
藤井藍田　一〇二　清水中洲　一〇三

合計一百三十五人

浪華人物誌卷一

岡本撫山著

書家

筒井白雲子

吟龍子と號し左京進と稱す京都の人書法御家流より出て一家をなす世に白雲子流と云ふ門葉甚多し浪華に住す寛文延寶間の人

福住如松子

名は道祐大阪の人尼崎町に住す書を能す延寶貞享年間の人

富島瑞峰

初め左近右衛門と稱す攝州南中島三番村の人藤田友閑(松花堂上足弟子)に從學し能く其法を得たり筆力松花堂門人の上に出つと云晩に友雲翁

と號す正德元年辛卯三月十二日沒す濱村墓地に葬る

永井如瓶

名は喜字は政純如瓶子と號し走帆堂といふ和氣由貞(字號未詳北小路宮內門人)の門人にして書の名譽あり著述の書三德筆抄、走帆堂筆帖、庭訓往來諺解等あり享保十六年辛亥七月二十八日沒年七十一墓は下寺町源聖寺にあり

山本文龍

名は命當字は大定通稱十藏文龍と號す攝州兎原郡五百崎の人幼より書を好み諸玩皆廢し夜を以て日に繼く後年巽邦人魯孟虔の法を羽州の人より傳へ受け筆術大に進み受業者門に滿つ貴賤少長となく諄々之を導きて倦ます名聲籍甚其人となり淡泊不群赤貧自ら安んず元文二年丁巳八月廿一日歿年五十二濱村三昧に葬る碑文は上月專菴撰也

菊川　同道山

御家流書家也初代は明和元年甲申十月廿四日沒墓は生玉法音寺に在り二代目道山喜造と稱す文化九年壬申正月廿一日沒墓は下寺超心寺にあり

戸田玄泉堂

和樣書家明和八年辛卯十一月十六日沒年六十八生玉法音寺に葬る

大藏勘解由

江月菴と號す生玉神社の神官なり明朝風の書を能す古今に冠たりと云安永天明年間の人谷町南吉祥寺に葬る

長松友松

名は信治友松と號す大阪の人岸和田藩に仕ふ後致仕して小學を以て生徒に授く初め書を柴田某に學ひ後青蓮院法王の門に入る法王尙幼し宮

内卿永菴(大谷氏名業廣青蓮院坊官)奥秘を攝受す永菴の書法海内に甲たり而して友松性剛直華麗は少しく遜るも遒勁之に過きたり從學者數百人天明七年丁未九月三日沒年七十墓は高津圓妙寺にあり

秦竹探

名は茂苞字は竹探忘筌堂と號す少き時より多能志を書法に潛め深く精妙に造り筆勢遒健にして尤大字を善くす名一時に赫たり從徒門に滿つ享保十五年庚戌正月八日疾て沒す享年五十八墓は谷町八丁目寺町重願寺にあり其妻も書を善くす

東竹堂

名は隆光別號は山光子又壽醉翁流鶯軒の號あり法名證入と云東野州の裔京師の人也佐々木志頭磨專念に學て書を善す大阪に住す元文三年八月十九日門人四千七百三十八人許可を蒙る者二百人社を結て大字中字

社と曰ふ天王寺元三大師の西に其書する所の磨訶般若經を納め塔を建つ谷町南天鷲寺にある橘季菴の碑は竹堂の書なりと元文年中歿男を珣介と云亦書を善せり

佐々木專林

名は春字は專林志頭磨と稱す號は松竹堂專念の嫡子也十歳父を喪ひ姉照元に依り父の業を傳へ書を以て名あり京師より大坂に遷る寛保元年辛酉八月十四日歿す年五十六墓は濱村墓地にあり碑文は門人梅溪鶴九皐也

新興蒙所

名は光鍾字は中連通稱文治積小館と號す江戸に生れ長して肥前蓮池藩に仕へ大阪に住す書名あり最も篆を善くす浪華の書風此人より一變すといふ寛永中秦篆遺編を京都にて購得て碑を難波瑞龍に建てたり其文

左の如し寶曆年間に沒す門下有名の人多し

邈矣籀史、惟道典墳、秦相李篆、玉箸垂雲、經國大業、利俗釋紛、萬方一體、不朽同文、西漢三國、頽廢隷分、晉代聖艸、王右將軍、古意墜地新思力勤、盛唐少監、季潮陽凝、學逼嶧碑、小篆再興、通神變化、鳳飛龍登、千歲卓識、誰與爭能、宋元明世、靡有師承、日本寛延、己巳二年、平安市上、購得遺篇、先秦篆象、字々鮮々、珍重光鍾、得道乃全、貞享丁卯、降產東都、六十三歲、篆成形模、疑迷湮滅、秋景春餘、樂只陶々、三昧惟書、東方青史、歲時三千、何人復古、編永久傳、

寛延辛未秋八月二十八日　　前肥蓮池城臣新興光鍾譔

著述　積小館書則　草書國牘

牧夏嶽

名は世儀字は升菴俗稱周平新興蒙所に學て書名あり寶曆十三年癸未七月十一日沒す墓は相坂一心寺にあり

泉必東

泉一に錢に作る名は貞字は恒卿必東は其號也浪華の人蒙所に學て書を能す幼より畫を好み四方に周游して其技を研き後ち沈南蘋の畫法を慕ひて花鳥人物を善す明和元年甲申十二月十日沒生玉菩提寺に葬る

尾崎南龍

名は樗字は散木新興蒙所に學て牧夏嶽泉必東と共に善書の名あり三人沒後南龍獨美を專にする事最久し初め徂徠の學派を河鹿門に受け晚年改て洛閩の學を爲す又老莊の書を好み禪に參し傍ら劍射、絃管、丹青、印章、養禽、種菊陶漁の諸伎に涉り人に加ふる一等たり老境に及ひ深く聖賢經世の學に歸し飯岡澹寧と交最も親し安永五年丙申二月五日歿年七十四墓は口繩坂淨春寺にあり碑文山口景德撰門人川勝惟信書也

僧佚山

字は默隱常足道人又調古菴と號す初め俗稱を森修來と云ふ大阪の人書を蒙所に學ひ後一家を爲し趙官光か說文長箋に據て專ら篆文を書す又書を能す京師に終ふ

著述　古篆論語　補闕千字文　補闕篆體異同歌

巽眞漁

名は正音字は子聲俗稱新與大藏蒙所の門人

渡邊頑石

名は實字廷倫岷翁と號す通稱又兵衛平瀨氏の子渡邊氏を嗣き大坂南組の總年寄たり讀書を好み詩文を嗜む書を能くし張一水の筆意を得たり早く妻を喪ひ復娶らす家婢妾を置かす以て其子の成立するに至る寶曆十三年癸未十一月十日歿年四十九墓は板松山一心寺にあり詩文二卷石山遺草と曰ふ碑文は嗣子維則也

岳玉淵

名は庸字は孔庸別號髯文或は玉淵子と稱す門人崇稱して九疑先生と云ふ大坂の人才穎無比秦漢の諸名迹を尋て其要を極め善く二王を模して六朝以下に涉らす然れとも唐季陽氷の三憤記に於ては深く其奧に詣り旁ら夢英字原の一書を參考して晩年其古篆論を篆して石に上す巧思有り嘗て八月の兎毫を獲工に命して筆を造らしむるに工人其毛を治むる能はす玉淵自ら取て之を治め工人に口授して筆始て成り極めて佳なり後多く製出す又石菖蒲を愛し護養の方亦精し寛政十年戊午十一月十二日病沒年六十二墓は高津中寺町禪林寺にあり賴春水在津記事に名艮とあり初名ならんか碑文は奧田元繼撰門人森川黃篆谷口莊隷

澤井穿石

名は居敬字は主一書を關山恭菴に學ふ恭庵は大庭某に學ふ某は佐々木

専念の門人なり穿石書名あり嘗て専念の遺物唐山製惟法不亂四字の磁印を専念の女照元か外孫吉見三河より得て佐々木の傳法を繼き松竹堂志頭磨と稱す晩年右手麻痺し左手を以て書す安永八年己亥正月二十日沒墓は高津中寺町法雲寺にあり碑文片山北海撰藤常充書

井村圭屑

名は信成字は子篤圭屑と號す正月堂と云ふ播州魚崎の人也少して寫字を好み業を寺井養拙の門人堀如圭に受け其宗を得又江田茂松の門に入て古義の學に從事し皆能く其業を成せり寛延中大風浪あり其家所有の大船悉く沈沒して資産を失ひ浪華に移居し書學を以て家を起す弟子千三百餘人老て益矍鑠たり八十歳の時門人壽筵を大蓮寺に開く圭屑席上にて壽の字を書く大さ三丈許り其筆大等の如く柄の長さ六七尺墨を濡せは其重さ十五六斤あり圭屑其の筆を執り踴躍して之を書くに疾舒法

336150

に合ひ觀る者堵の如く歎賞せさるなし城代戸田氏之を聞て翌日求めて展觀す事京師に聞へ某公卿も亦求め觀て賞翫せり因て其名益高し天明七年丁未五月廿三日歿年八十三子孫業を嗣く墓は小橋竹林寺に在り碑文は片山北海也下寺町大泉坊に在る堀如圭遺物碑は圭屑書なり

福住如松子（重出）

名は道祐大阪の人書を能す貞享中

櫻井新助

名字未詳大阪に寓す甲斐流の能品

關世美

名は世美字は士濟南賴と號す浪華の人書體一家をなす

牟岐述齋

名は純字は平介隴陽と號す浪華の人高津社内にある芥川煥撰高臺之頌

碑は此人の書なり明和九年壬辰八月建る

名和八郎

名は雀夫篆隷に工なり技藝多し北御堂の後に住し墻壁皆赤く塗れり因て自ら彤壁と稱す又魯亭と號す其人と爲り質素寡言片山北海と交善し天明寛政間

奥田子般

名は侃憲字は子般浪華の人寛政中

藤井樗亭

名は元肅字は子穆通稱初は鴻平後に東祗と更む大坂の人醫を業とす書を趙陶齋に學ひ能名あり人と爲り豪岩快活にして博聞辨達痛飲大笑座を驚かし而して詩文既に成り當時の書生を壓倒せり文化七年沒其弟の江戸に之くを送る詩

東海道千里、芙蓉插碧天、人文識其富、翰墨豈無緣、衣食慙吾拙、桑蓬覺汝賢、斷機母老矣、自若莫經年、

森川竹窓

名は世黄字は離吉竹窓又良翁と號す和州鳥屋村の人十歳の時江戸に出て佐竹侯に仕ふ數年ならす致仕して浪華に移住す書を岳玉淵に學ひ後古法帖を慕ふて一家を成し又皇朝上代を好みて之を模刻す畫は南畫を能くし殊に墨竹に妙を得たり又篆刻を能くし好て古器物を蒐集して愛玩す著す所、浪華帖、雨笠餘情、艸行集字句選、其他著書多し當時集古十種編纂に際し囑託を受け盡力尠からすと云天保元年十一月二日歿す年六十八小橋寺町大應寺に葬る生前豫め碑を建て左の文を刻す

人間生涯之所爲、則陳眉公詩曰、不會謀生不讀書、數竿修竹是吾廬、近來學得長生法、賣盡癡獃又蠢愚、

浦西可亭

文化二年乙丑十二月十日沒年六十九北長柄墓地に葬る

竹村雪啓

文化三年丙寅七月廿五日沒年六十三墓は游行寺圓成院にあり

武村松軒

俗稱清造近代和樣の名家なり文化十四年丁丑十月十三日沒年五十三生玉堂閣寺に葬る松軒の妻を三木子と云ふ桂宗信の門人となりて畫を能し春畫に巧なり桂三木と號す

筒井尙堂

文政三年庚辰八月五日沒一心寺に葬る

竹原澧水

文政五年壬午九月十九日沒濱村三昧に墓あり

長雄旭雲

名譽の書家長雄流三代目にして俗稱を牢造といふ文政十一年戊子四月十二日沒年五十五天王寺東國分寺に墓あり

藤野一郎

初め日蓮宗の僧徒たり後に歸俗す名は長春字は甌王環中と號す書を善し篆刻に工なり天保二年辛卯九月三日沒年六十七上福島淨祐寺に葬る

儒家

一井鳳梧

名は光宣字は桐助桐梧主又鳳梧攸齋と號す雲州松江の人也幼より出群の資あり京師に出て鴻儒某氏に育せらる長して業を林羅山に受け學成て諸侯に歷仕す遂に辭し去て攝和の間に隱れ後浪華伏見兩替町に住す

遠近從學者千二百人浪華に文學を講する此人を首とす平日著述を好ます門人之を勸む答て曰く我竊に論語述而の篇端に比するものなり豈其滓を啜て其滓を述んや其述て譽あると其後に毀なきと孰れそと遂に作らす其臨沒の前日平日親炙の門人所聞を記して鳳梧論說と題せるものを出し他日梓行を乞ふ鳳梧一領するのみ其爲人飲食器物奇美を要めす有れは有るに隨ひ無けれは無に任せて晏如常に安する所に適す老て益壯なり百十六歲にして十六歲の妾あり壽字盃に「百のけて相生年の片白髮」といへる句を短冊に書けるを添へて知己の方へ贈れりとそ此年七月廿五日病歿す時享保十六年辛亥也高津寺町圓妙寺に葬る

鳥山芝軒　同香軒

名は輔寬字は碩夫芝軒又は鳴春と號す通稱は左太夫京師の人なり詩名あり書は二王及三跡を學て名あり芝軒吟稿を著す正德五年乙未六月廿

一日歿す墓は難波瑞龍寺にあり歿年六十一

香軒名は輔門字は通德香軒と號す通稱孫平次芝軒の子也香軒吟稿を著す享保十四年己酉閏六月十三日歿享年四十三墓は父と同所に在り今父子の詩二三を抄出す

浪華郭外移居　芝軒

巷南皆梵宇、無處不樓臺、賃宅移書帙、招隣設酒杯、小池當戶滿、雙井倚門開、僻在任人說、未妨詩客來、

三月晦日

堂々春事一宵殘、花底開筵欲別難、身上春袍違我計、抔中絲蟻盡君歡、津亭有月吟應好、野店無燈夢亦寒、洒淚肯爲兒女態、直從醉裡發征鞍、

樓上遠眺

百尺樓臺坐夕暉、故山烟樹遠依々、白雲不爲紅塵役、直向天涯自在飛、

春日游川崎亭子　香軒

江上一亭幽、携壺得再遊、爲隣皆竹樹、過岸幾蘭舟、望可憐青艸、間堪羨白鷗、惜春何不醉、況解客中愁、

晩歩

歸鳥沙村外、炊煙野樹間、行々人影動、回首月離山、

五井持軒　同蘭洲

名は守任字は加介大阪の人京師に遊學し初め醫を學ふ一婦人を療して方劑適せす歎曰人を活さんとして反て人を死に致すかと遂に業を改て儒となる一時名儒伊藤仁齋、東涯、中村惕齋、貝原益軒、耻軒、三輪執齋、松下見櫟等と友とし善し京師に在る事十餘年にして大阪に歸る當時府下の人學を講する者稀なり持軒訓誘する事多年人稍學に嚮ふを知る大和郡山城主本多侯其名を聞て之を聘す其狀貌の古朴なるを見歎曰浪華の土風

奢侈を尚ぶ其間に居る事四十年にして其風に染ます豈常人ならんやと請て論語を講せしむるに言語朗暢にして辨論明備なり侯大に悅ふ其學初め朱子を宗とす晩年稍從違あり然れとも其門弟に授るには大旨を述て辨駁を爲さす常に謂へらく人にして四書に通する事を得は宇宙第一理を識るべし之を躬に行ふに於ては天下の能事畢ると故に書を說くに學庸語孟を循環して他書に及ばず世人戲號して四書屋加助と云へり業餘下河邊長流に學て和歌を能す又家に日本紀の學を傳へ甚精詳にして迂恠不經の說を雜へす夙く至性あり嘗て父の病に侍し誤て藝器に觸れ大に駭き敬て之を移せり壯歲家富たりしに親族に掠め取られたりしも問ひも糺さす淡泊を守て晏如たり常に敗紙の空白なる所を斷切りて書翰の用と爲し天物を暴殄するを戒む天質坦率にして容躰振らす言辭を飾らす平生嘗て人の惡を言はす人の言理に當らさる事あるも咎めす唯

某の解せさる所なりと云ふのみ嘗て人に謂て曰人は惡を爲す能はさるものなりと一書生卒然曰吾輩然る能はすと持軒色を正して曰惡若し爲す可んは試に之を爲せと死せんとする前一日門人を召して遺囑せんとして言ふこと能はす筆を取り臥なから書て曰偏執者と爭辨すること勿れ唯罵詈を肆にして益なしと享保六年辛丑閏七月十八日病歿年八十一墓は天滿東寺町九品寺にあり二子長を純實と曰江戸に任官す次を純禎と曰儒を以て顯る碑文は伊藤東涯也

蘭洲名は純禎字は子禎別號洌菴藤九郎と稱す持軒の次子なり幼時家貧を以て尼崎及信濃に客居す正德二年大阪に歸り父母を養ふ父母の喪に丁り三年服制を行ひ書劍を賣て葬り傭書して自給す中井甃菴懷德堂を大阪に創設するに及び助教授と爲る享保十二年江戸に往き十六年津輕藩の聘に應す津輕の地僻陬にして俗甚た陋し蘭洲藩主に隨ひ國に至る

に及て文化漸く開くの兆あり蘭洲進講する毎に可否を論して忌み隱す所なし重臣或は諷止するものあれは其言益剴切なり上下之を敬憚す既にして言ふ所を果し行はす乃病を移して仕を辭す有司蘭洲の大器を識か故に藩國に在るを樂まさるを疑ひ沮抑して通せす蘭洲懇に歸老の外他意なきを陳へ久して志を遂るを得元文四年大阪に歸り懷德堂の教授たり津輕藩再ひ幣を厚ふして召し其他よりも招聘すれとも應せす爲人豪宕邁英にして人と交り限界を設けす經學は程朱に依歸すれとも務て末流支離の弊を祛き當時復古學盛に行はるゝも獨立して非伊非物非費質疑の諸篇を著して其說を拒絕せり又旁ら國書を治めて讀史訪議萬葉集詁古今通勢語通源語詁源語提要を著して注家沿習の譌を訂すこと多し家もと貧なり晩年病に罹るや人を煩すを恐れて痛く衣食の費を節すること常人の堪ふる能はさる所なり人之を感す詩有り其貧を證するに

足れり著述は上に擧るの外蘭洲茗話瑣語あり寶曆十二年壬午三月十七日歿年六十六墓は先塋狹隘なるを以て八丁目寺町實相寺に葬る碑文は中井竹山撰同履軒書並篆子なし宗家に附祀すと云

二之日栗烈、如此病軀何、賴有醉鄕在、更無方孔過、
風淫三歲疾、日々苦如囚、堪歎魏公子、縮生欲拂憂、

中江岷山

名は一貫字は平八後快安と稱す伊賀上柘植村の人也伊藤仁齋に學ひ聞達を求めず放言自適古學を唱明するを以て自任す絕て詩を作らす甚た詞章の徒を賤み薄し以て治道に益なしとす氣岸高亢にして苟も合はす塾中一扁額を揭く其文に曰謏詞巧說不曾學習、卑禮諂態不曾操演、岷山の文章多く然則二字を用ゆ人稱して然則先生と云へり享保十一年丙午六月十日病歿年七十二墓は坂松山一心寺にあり碑文は伊藤東涯撰理氣辨四書辨論を著す

三宅石菴

名は正名字は實父石菴又萬年と號す京師の人なり兄弟六人ありしが中に弟觀瀾と石菴殊に學を好む爲人沈靜儉簡にして英敏勇決稍長じて家產敗亡し宿債を返して殘る金十片あり石菴弟に對して曰く殘る所纔なりと雖亦學を爲すに足ると兄弟案を並べて寢食を忘る幾ほどもなく十片の金盡たりしかば兄弟手を携へて江戸に遊ぶ又思ふ所有て觀瀾を殘して自は京に歸れりさるに其頃讃岐に木村某といふ人其名を慕ひて來りすゝめて國に伴しかば彼所に客居する事四年其後浪華に來りて住み學風大に行はれ其門弟子日に月に盛なり門弟中井甃菴等浪華に學塲を設ん事を計り江戸に請ふて許さる石菴を請ふて敎授たらしめんとすれども固辭して就かず再三言を盡して勸むるに辭することを得ず其請に

應せり生涯布衣より外は衣ず書は顔眞卿を學んで遒勁正鋒にして妙なり印信を用る事なし詩文は固より和歌俳諧を嗜めり俳號を泉石といふ然れども皆緒餘として意とせず門に來るものには只人道の理を責敎學の趣を述て更に他言をまじへず享保十五年庚戌七月十六日病歿享年六十六河内神光寺に葬る末子正誼字は子和才次郎と稱し春樓と號す業を嗣ぎて懷德書院の敎授たり春樓父の遺稿を一行李と爲し起臥常に離さゝりしが或日客を留て宴飲したる時文房の諸器と共に窓下に移し置しを其夜竊み去られたり百方搜索せしも遂に出ず偸兒其平日大切に扱ふを見て寶貨と見誤りしならんと云香川太冲石菴を評して曰世に石菴を呼て鵷學と爲すは其首は朱子に其尾は陽明に其聲は仁齋に似たればなりと石菴の詩文傳ふるもの希なり今失題の詩一首を載す

麻衣携竹杖、千里一身輕、郊野花無語、關山月有情、沈吟過故址、奇句動邊城、

我亦四方客、燕歌報楚聲、

又發句は

つい聞けはきたなし庭は梅たらけ

眞白に眞四角なり藏の月

奢られて又わひらるゝ紙子かな

曉に乞食を見て

寐れはねにあの薦一重霜一重

酒がいふと端書して

飯鮪のいひとかたらむ身のむかし

富永仲基

名は德通芳春と號す仲基は字なり俗稱道明寺屋吉左衛門浪華の人醬油製造を業とす三宅万年に從學し又上代假名善書の名あり後說蔽を著し

て儒及諸子を誹るによつて万年と絶す又出定後語を著して浮屠氏を論ずその序文中願くは胡地に及して牟尼降神の地に傳へんと云々墓は下寺町西照寺にあり芳春第四子定堅字は子剛鐵齋又蘭皐と號す荒木氏を嗣ぐ雞肋集を著す

木戸由巳

名は元春字は純仁大阪に敎授す延享年中終

倉鉢魯石

天明七年丁未九月十三日歿年六十六八丁目寺町西海寺に葬る

上月專菴

鶴州と號す俗稱丹藏儒家にして醫を兼たり寶曆二年壬申二月六日歿年四十九八丁目寺町專念寺に葬る著述の書

和韓唱和錄　日本學則　徂徠學則辨

中井甃菴　同竹山　同蕉園　同履軒

甃菴名は誠之字は叔貴忠藏と稱し甃菴と號す播州龍野の人也父に從て大阪に出で弟と共に三宅石菴に就て學ぶ父赤穗に徙るに及び之に從ひ行しが父歿するや服除きて後大阪に來り復石菴に從ひ學業大に進めり常に大阪に學校を設立して府民を敎導せんと欲し二三友に議して江戸に赴き乞ふ所あらんとし大島三輪の二氏に謀るに二氏爲に周旋す享保十一年再び東して請願せしに是年六月官命を大阪町奉行に傳へ尼崎町の地を撰み戸役を除きて之を下附せらる於是て講堂を建て石菴を招待して敎授たらしめ生徒大に進み遠方より來り學ぶ者も亦多し之を懷德堂の創業とす石菴歿後代て敎授となる當時伊藤荻生の學派大に天下に行はるれども甃菴之を聞かざるが如く專ら程朱の學を治め浮華を抑へ實踐を勉む世人稱して醇儒と爲す龍野藩に田邊和介と云者あり禍心を

抱く事顯るゝに及び權貴の家に匿れ藩人捕る能はず甃菴藩侯の命を受け京都奈良に奔走して之を摘發し和介遂に伏誅す侯悅て給するに稟米を以てす甃菴藩の事に於て知て言はざるなし君臣之を重んず甃菴の母播州の宗家にあり子息夭亡する者多きを以て常に樂まず甃菴乃ち歸養して日々族人故舊を招き宴を設けて母の歡を盡す母壽九十一天年を以て終る又親姻の孤女五人を養ひ資裝を具へ之を嫁せしめ其身を處する泊如たり學舍年を經て傾頽する所あり之を修繕して土木一新舊規に增すあり人皆其理財の才に服せり寶曆八年戊寅六月十七日病歿年六十六貽範と謚す墓は八丁目寺町誓願寺にあり碑文は五井蘭洲撰三宅春樓書賴春水在津記事に甃菴の碑石は府下無雙の良質とあり甃菴遺書して學校の事を擧て石菴の子春樓に屬し一言の妻子に及ぶなし初め學校を建る時子に傳へざるを約せしを以てなり平生實踐を主とするを以て詩賦

文章及和文和歌ありと雖も意と爲さず脫稿せざるもの多し遺著、葬祭私說、不問語、甃菴雜記、貽範先生遺稿、和文集等也二子積善積德

積善字は子慶善太と稱す號は竹山又渫翁雪翁其竹醉日に生れ關羽生日と同じきを以て同關子の別號あり五井蘭洲に學ぶ體軀肥大健啖豪飲匹敵無し豪邁にして大志あり論談爽快拘儒の態なく博學能文經濟の才あり家學を以て程朱を尊崇すれども偏隘固滯の風なく王魯齋を以て自ら比し朱說の疑しきものは明辨經旨を得るを以て主とす肥後の敎官辛島鹽井嘗て竹山を見て其學の淵源を問ふに竹山曰吾學林に非ず山崎に非ず一家の宋學也と當時世間宋學を治る者林家の門人に非れば闇齋の派なるを以て此答を爲せるなり松平定信老中たりし時大阪を巡視し引見して經義を講せしめ又時務を諮詢す竹山艸茅危言を著して之を進む其論ずる所事に切なるもの多し三宅春樓に代懷德書院長と爲る寬政四年

大火に書院も亦災に罹れり竹山乃江戸に赴き上書して再建を請ふ官金三百兩を給して土木の費を助く再築成るに及て生徒益進めり竹山仕官を好まず薩摩肥後重祿を以て招けども應ぜず加賀亦之を聘すれども起たず其新井白蛾を聘するを聞き笑て曰く我を以て易者に代ふるかと嘗て城州西岡革島村義兵衛の孝狀を記して革島物語といふ一時傳播して禁内に入り天皇太后の御覽を經て叡感深く義兵衛母子に菓子銀錠を賜はれり安永元年江戸に赴き東征稿を著す天皇徽詔して叡覽を賜へり竹山多力或日力士谷風來訪ふ時に衆人會集酒酣にして竹山盃を谷風に與へて枕引をせんと請ふ谷風笑ひ諾して之を爲すに枕破れたり別の枕を執て再び引きしに遂に谷風に引かれたり然れども手枕を離さゞりし老後に及び談此事に至れば曰谷風の力敵すべからざるは固より論なし引かれて枕を離さゞりしは之に負けずと云ふも可なりとて笑へり幕府著述の逸史を納めしめ賞するに時服を以てす嘗て詩律兆を著して聲律を詳論す曰我邦の先輩詩を作り心を宮商に留る者は唯新井白石僧萬菴二人のみと高山彦九郎曰中井竹山兄弟口を極めて人の善を稱す其人重ずべし又必ずしも稱揚せざる者あり其人の有識も亦重ずべしと幕相嘗て當世の儒士を岡田寒泉に問ふ寒泉曰文辨雄豪は中井善太に如くなし學術純粹なるは尾藤良助優れりと文化元年甲子二月五日病歿年七十五墓は誓願寺にあり長子曾弘先て歿す次子曾縮字は子反通稱七郎抑樓又碩果と號す嗣て書院の長となる天保十一年庚子三月二十四日歿年七十子なし履軒の孫及泉を養ふて子とす通稱修二桐園と號す書院の助教たり

竹山著述

詩斷　易斷　四書斷　近思錄斷　小學斷

比事蹄三　逸史十三　國字牘八　奠陰集十二　草茅危言五

東稽四　閑距餘筆一　奠陰略稿一　西岡集一　芳山紀行一
續芳原物語一　新題百首詩一　報姦錄一　尙書管見一　非徵六
詩律兆三　災後蕘言一　中庸定本一　革島物語一　蒙幼篇一
社倉私議一　洛陽志一　建學私議一

曾弘字は伯毅蕉園と號す又仙坡介庵の別號あり通稱は遠藏人と爲り口吃て文藻敏捷今古に罕れなり嘗て祇南海の一夜百律を讀て其敏捷を稱す或曰子の絕望する所か蕉園曰我期月律詩を學ばゞ伯玉たらんこと何か有らんと適ま疾に罹り數月にして起つ時に仲春望なり自ら賦才を試んと欲して題を竹山に乞ふ乃ち天象地理艸木禽獸蟲魚器用人事に就き各一を撰み十題として之に授く蕉園其日の午の刻より子の刻に迄り之を完成す凡て一萬七百言人曰是れ偶然にして成る無らんや安ぞ之を繼ぐ事を得んやと蕉園再び題を竹山に乞て曰曩に十賦を試み幸に期を徳らす今再試して豎子の口を塞んと欲すと竹山笑て應へず更に人事十題を撰て授るに乃ち期の如くにして成り更に每題に加ふるに小序を以て す初め前編の成る後二十字を改め十八字を削り十八字を加ふ旣にして曰是れ當日の面目を失ふなりと因て後編は一字をも增減改竄せず於是乎知る知らざるとなく衆皆歎服す時に年二十六也寬政乙卯の春芳野に遊び往返十餘日文詩二百十餘篇を著し詩を驢囊文を碧囊と名く其餘年表內外篇國文にして杞憂漫言を著す遺文詩數百篇あり外姪芦河寒泉編次して壎集と號す蕉園嘗て蘇若蘭が織錦詩に倣ひ創意して新圖を製するもの五つ曰金屈膝敗天公捿禽籠纈纈幃護花羅皆形を以て名け組織するに五言絕句を以てし藝苑の一戲と爲す平生多病享和三年癸亥八月四日歿年三十七竹山悼詩に我爲日東哀の句あり賴山陽稱して文妖と爲す墓は誓願寺にあり

履軒名は積德字は處叔通稱は德二水哉館天樂樓の別號あり甃菴の次子也兄竹山と共に五井蘭洲に學ぶ經を治る精密にして一字をも苟めにせず群言を折衷して意の合はざるものは名賢鉅儒人々尊信する所と雖ども辨駁規切して避くる事なし竹山の朱說に於ける從違あれども其本領に至ては背馳せざれども履軒は復初居敬明鏡止水等の說に於て頗る規切する所あり嘗て平生治經の大意を述る言に曰新奇を好みて故常を厭ふ者は與に經を論ずべからず剛戾にして佛敵たるを好む者も亦與に經を論ずべからず然れども是等は皆君子の事に非ず若し夫の學行敦實にして篤く先儒を信じ夢寐に景慕する者は君子に非ずや然れども與に經を論ず可からざる者あり經を論ずるの難きことこゝに於て知るべし唯平心讀書愛憎を新故に生せず信疑を耳目に岐せず深く古經の未だ瞭かならざるを慨き聖人の心後世に伸びざるを痛み如憤如悶寢食を忘れ毀譽得喪を度外に置きて吃々鑽攻して老の至らんとするを知らざる者にして始て與に經を論ずべきのみ嗚呼今の世に當り其幾人を得んか吾竊に後の人に望み有りと故に其持論世と合はざれども挺然顧みざるなり初め七經雕題を著し晩年又七經逢原を著し經旨を考索して益精微を極め世其儔罕れにして歸然一家言を爲せり著述の書皆名氏を錄せず又輙く人に示さず曰我後の子雲を俟つと文辭圓活甚奇致あり東坡以後文章無しとす詩を作る必古韻を用ふ姿貌魁秀にして器宇曠邁一世を睨視す然れども語て孝子順孫の事狀に及べば容を動し稱賛して止まず竹山も亦然り履軒殊に甚しと云素草隸を善すれども性偏僻にして乞ふ者有るも痛く拒て書かず交苟も合はず妄に戸を出でず自ら幽人と號し隱居放言を以て處り論談奇僻動もすれば人を駭かす書生來り謁する者あれば則曰汝先づ酒を飲を學て後文を學ぶべし然らざれば欝悶病を發せんと

懷德堂の會集に或人人事多忙未だ門に拜せずと言ふ履軒曰來訪せられざる何の賜か之に如かんと嘗て子弟と住吉に游しに丐者途上に並居て錢を乞ひ皆言朝夕を保つ能はずと履軒煩に堪へず顧て謂曰汝輩生て世に益なし速に死するに如かず何ぞ夕を待んやと嘗て曰く四書五經性理の三大全儒者の三大厄と謂ふ可しと松平和泉守使を遣はして之を聘す履軒押入の内に隱れて使者に遇はず町奉行某履軒を欽慕し禮を厚して之を召すに辭して使者を見ず使者還て之を告ぐ奉行歎て曰所謂天子臣とするを得ず諸侯友とするを得ざるものなりと江戸の塙檢校嘗て大阪に至り履軒を見んと欲し町奉行より町年寄を以て紹介として履軒に告るに履軒曰我聞塙氏は首を源氏物語等に埋るものなりと我と道同じからず共に談ず可きもの無しと固く辭して見ず賴山陽嘗て門に至り刺を通ず履軒曰不孝子吾見るを欲せずと拒て遇はず一士人あり方孝孺が義

を執る太甚しきを論ず履軒遽に刀を執り毅然として曰子も人に事るものならずや果して孝孺を以て太甚とするかと其人大に懼れて失言を謝せり嘗て骨董店を過ぎ古鐔を見て其價を問はず直に南鐐銀四片を出して之を買ふ店主驚き此物の價此の如く尊からずと云ふ履軒强て之を與へて還れり門人某其鐔の佳なるを見て金一兩に代んことを乞ふ聽かず固く請て許さる履軒乃ち其加ふる所の四片を携へ復骨董店に至り之を與へて去る店主恠て迹を追ひ其名居を認め大儒履軒たるを知り金を返すも受けざるを察し一朝魚を籠に入れて去れりと文化十四年丁丑二月十五日歿享年八十六文淸と謚す墓は誓願寺に在り平生飲食程度あり猥に增減せず或人嘗て美饌を贈る履軒之を見て曰く瞞されなと尾州藩邸守中西某蒸菓子を饋る履軒顧て其子を戒て曰くこれ所謂小倉野其味甚美なれども毒物也必食ふ勿れ中西駭て故を問ふ曰糖の甘きもの小兒の

病を醵し易く其害少からず故に吾家兒をして糖味を食はしめざるなり
と中西憮然たり賴春水履軒に贈る詩に書劍別來三十歲、八旬猶似昔游年、
酒飯一併稱六合、知君修養得天然、以て其平生を見る可し履軒著述

七經逢原廿三　七經雕題十六　典謨按一　諧韻瑚連一　履軒古韻一
治水活論一　河圖略基一　深衣圖解一　履軒數聞一　傳疑小史一
通語三　弊帚一　同續篇一　同季篇一　耄言二
月可錄一　外編二　枕上雜題一　古風三　詁辨一
水哉子一　越俎弄筆一　辨妄一　服忌令圖一　簡諒篇一
洛汭奚囊一　修辭通一　絕句逢原一　連珠年表一　風懷百話一
姓氏斷一
和文は　四茅議附錄雜篇四　華胥國物語三　同歌合一　樺帖畫一
夢路歌枕百首贅口一　述龍篇一　刀甲辨一　老婆心一

破腹卷記一　囈語一　越吟歌三　唐詩選國字解五絕一
古今二徵一　畫鐫一　有間星四　神樂催馬樂一　古都多飛一
昔の旅一　和文集二
其雕題せしは　小學　國語　史記　漢書　後漢書　戰國策　老子
莊子　世語　晉書　三國史　五代史　古文後集　大和本艸等なり
男柚園名は　文馬篇を著す天保五年甲午五月廿一日歿年五十三墓は履
軒同所にあり孫桐園名は及泉修二と稱す懷德堂の助敎たり

阮東郭

名は大簡字は子行東郭と號す通稱は文藏或は文菴に作る菅沼氏自ら阮
氏を稱す江戸の人也物徂徠の學を唱へ浪華に敎授す寶曆十三年癸未十
二月四日歿年七十四墓は北野寒山寺に在り碑銘は服元雄也子攀髯字は
子登西陵山人又玉屋山人と號す通稱文次郎玉屋集を著す東郭著述

論語徵疏　學庸闡　助聲解　文會錄　鳴鳳集　東郭文集

菅甘谷　兄樂郊

名は晨耀字は子旭通稱は小善甘谷と號す父播州姫路藩士原姓藤原中頃府川氏と稱す岸和田藩堀氏の義子となり後致仕す堀氏菅原姓なるを以て菅と稱す物徂徠に學ぶ初め南嶠と號す徂徠集に屈子旭南嶠秀才とあるは甘谷の事也大阪に住し專ら師說を唱ふ大阪の地物氏の學を唱ふるは此人より起ると云兄樂郊、葛蝨庵、岡魯庵、篠崎三島は此門より出つ寶曆十四年三月廿四日歿年七十四墓は天王寺東舍利寺に在り碑は天保五年の再建に係り文は藤澤東畡撰阿部溫書也南嶠園集甘谷遺稿の著あり其詩二首を擧く

至日

初陽應律入良辰、擧目江南雲物新、文史三冬慙白首、風光一日憶青春、稍知操瑟終違好、無奈敝裘見厭貧、十載交游寥落盡、梅花開早寄誰人、

客舍花樹歌

客歸花作主、客住花爲賓、主不長住、春風世路塵、

樂郊名は臧字は臧宗通稱橋本宇藏甘谷に從ひ物徂徠の學を受く大阪に住し敎授す隱者なり葛蝨庵篠崎三島之を師とす明和二年乙酉五月廿三日歿墓は福島妙德寺にあり其碑面題して樂郊兄先生墓と曰ふ高芙蓉の隸書也樂郊の詩

題扇面富士山

六十餘州不二山、芙蓉突兀壓東關、四時絕頂常餘雪、多少行人駐馬間、

萱野考澗　同錢塘

名は儀章字は可貞通稱市平考澗と號す熊本藩の人少より好て書を讀み文を屬し屢京都江戸に客居して游道甚た廣し海內知名の儒者物徂徠梁

田蛻巖等と交際し藩に在ては大冢退野藪愼菴と親しく交はる二人皆藩の名士なり考澗北條流の兵法を練習して最善くす射劍槍の術も亦第二に落ちす漸次に登庸せられ元文元年大阪邸守になる廉にして濵れす邸事治まり辨す諸藩士の大阪邸守たるもの會議すること有る毎に皆考澗を推て宿老長者とし必す諮詢する所有り考澗劇職に居れとも手卷を釋かす平日人と藝を談して相娛む寶暦五年藩にて新に國學を建つ考澗於是大坂邸に學舍を開き菁莪館と名け儒者を聘して經を講せしめ邸中の子弟も聽受せしむ考澗平日子に誨ふるに忠孝正直の四を以てし年八十を踰へ猶能く悍馬を御し回旋馳驅少壯に異ならす蛻巖と詩を論して往復す其矍鑠にして力學なる見るへし寶暦十一年三月四日歿年八十七墓は高津中寺町法雲寺に有碑文は秋山玉山撰巽正音書也子來章家を嗣く

還鄕飲中公宅奉諸公

考澗

刀環此夕一啣盃、人去星移感轉催、聞說學仙生羽翰、可憐牽役老駑駘、燈前寥雨談猶熟、曲裡高山懷更聞、肯藉舊棲叢桂色、相逢忽漫賦歸來、

來章字は君譽通稱司馬太錢塘と號す考澗の次子也兄早く歿す錢塘家を嗣き考澗に代て邸守となる父の法に循ひ仁厚父に加ふ一邸和熟し敗事なし錢塘父より忠孝正直の四字の敎を受け終身能く之を守れり錢塘父子大阪に居り文學の稱四方に聞ゆ錢塘冲虛謙退にして賢を尊ひ士に下り交游日に廣し府下藝苑の會集には錢塘必ず與る絃歌誦詠書生の如し篤く程朱を信し旁ら技藝多く最も弓槍劍法に精し天明元年辛丑十月廿六日歿年五十三子凞載嗣て邸守となる三世一職は蓋特恩なりと云墓は考澗と同所にあり碑文は藪孤山撰篠崎三島書也

井狩雪溪

名字未詳通稱彦三郎大阪の人精學を以て聞ゆ明和三年丙戌十月十九日

歿墓は天王寺東國分寺にあり

留守退藏

名は友信字は退藏括囊又希齋と號す奥州仙臺の人なり京師に來り三宅尚齋に學ひ大阪に徙て敎授す初め尚齋歿後門人久米訂齋多田東溪石王塞軒等相議して曰先師不幸にして嗣なし吾輩遺業を講して生徒に授くと雖も長く今日の如くなる能はざるへし如かず師の神主と狼寔錄とを瘞みて他人に汚さるゝことなからんにはと退藏又其座に列し獨り以て是とせす然れとも衆議遂に決して二物を新黑谷光明寺にある尚齋の墓側に瘞たり明日寺僧遽しく來報して曰く昨夜盜あり墓を發けり祢適見て之を尤めたるに彼劍を拔て恐喝しけれは祢如何ともする能はす彼遂に其意を恣にして立去れり墓中何の財貨ありて此厄を致せるやと訂齋慨額して曰此必退藏の爲す所ならんと即往て之を視れに果して神主と狼寔錄と失せたりとなん狼寔錄は尚齋忍藩の仕を辭せんとして屢乞ふて止まさるより幽囚せられし中に臂を刺て其血にて書き著はせし書なり退藏和學通を著はし神道儒道一歸にして品異なる事を論し神道者の是非を辨して神道の正統を得たるは山崎垂加一人なりと云へり又和漢文會錄稱呼辨正を著す寶曆十一年壽藏を蛇坂淨春寺に作り碑背に文あり明和二年乙酉四月廿七日歿年六十一夫妻こゝに葬る

穗積能改齋

名は以貫字は伊助能改齋と號す父を與信と云播州姫路より城州伏見に徙る算學及韻鏡に精し下學算法を著し時名あり伊助夙に古學を信し伊藤東涯に就て學ひ講習の日毎に必す席に列す後道遠きを以て柳原氏に仕へ研究に便す學成て伏見に歸養す父歿して大阪に徙り敎授す資性温良樂易物と競はす未た疾言遽色の狀あるを見す平日嗜酒讀書文を著し

名譽を求めず門人の請に從ひ多く國字解を作る明和六己丑八月廿一日歿年七十八生玉齡延寺に葬る著述

唐土王代一覽　經學要字箋　世說新語補解　韻鏡反切捷徑指南

四書國字解　五經國字解　世說國字解

片山北海

名は猷字は孝秩通稱仲藏北海又孤雲と號す越後新潟の人家世々農たり北海學を好めとも師友に乏し十八歳京師に來り宇野士新の門に學ぶ士新之を器として側に侍せしむ幾ならずして士新歿して生計困乏父も亦家を挈て來り朝夕殆んど給せず北海苦辛して克く父に事へ驩を竭し學亦日に進む浪華に居占し業大に行はる閑靖寡欲世と競はず嘗て岡元鳳葛子琴、賴千秋、尾藤子尹、田子明、篠安道と詩社を結び混沌と名く皆北海を推して盟主とす世人之を七才子と呼ぶ北海詩文を作るに長篇大作と雖も艸稿を立てず腹稿熟せざれば筆を下さず素記憶に富み書堂會讀の時北海先づ數葉を開て復翻閱せず諸人議論紛起するに及て北海之を斷ずると明晰其註釋を暗記して一も誤らず又雅集の日坐客詩有れば北海一見して後數日前會の詩句若くは全篇を擧て之を評論すること極て詳かなり又音樂茶伎を好み尤笛を善す年老に及て家人絹を以て綿衾に代んと乞ふ北海曰く吾昔親を養ひ輕暖をして尊體に足らしむる能はず今何ぞ之を爲るに忍んやと因て涙を流すこと數行寛政二年庚戌九月廿二日歿年六十八墓は小橋寺町梅松院にあり碑文は竺常譔篠崎三島書也孤雲館遺稿六卷を著す混沌社中の人鳥山崧岳、田中鳴門、細合斗南、篠崎三島、佐々木魯菴、萱野錢塘、木村巽齋、岡魯庵、葛蠡庵、河野恕齋、隱岐子遠、平壽王、岡田君章、小山伯鳳、井坂雲卿、西村孟淸、福承明の如きは詳略はあれども皆傳あり前後に擧たり尾藤二洲の幕府に徵庸せられ賴春水の其本國藝藩に事

へし事跡行狀は世に傳あれば載せず清履玄道富維章有明の二人は事迹考ふ可からず

鳥山崧岳

名は宗成字は世章越前府中の人初め京に入り醫を香川太冲に學び又伊藤東涯の門に及ぶ浪華に住み醫を業とし詩を善す崧岳耆宿を以て詩社の飲必自上席に居れり然れども葛蠡菴岡魯庵を重じて曰我及ばざる所也と葛蠡菴賴千秋を視る小兒の如し人も亦之に狎れ親む崧岳笑歡終夕長者の風あり性酒を嗜まず詩成れば北海と共に衆に先ちて去る西村孟清の歿する崧岳舊知の故を以て葬事を經紀し銅板を以て其姓名行事を記して棺上に置けり安永五年丙申三月廿六日歿年七十餘口繩坂珊瑚寺に葬る遺命して碑碣を立てず夫妻合葬して梅二株を栽て標とす著述は名流春游篇　批評唐絶句選　詩式　垂葭館詩稿　崧岳文集

其詩

謝和州南溪師來訪見惠團扇

投我南都扇、宛似三笠月、一揮清風生、飄々奪炎熱、別後憶君時、懷袖頻出沒、出沒君不見、遙望白雲窟、

寄越南梅北溪

籬菊霜濃楓葉衰、江南十月既凄其、關山北望雲如墨、知是故園飛雪時、

田中鳴門

名は章字は子明通稱七郎右衛門近江栗太郡の人也出て浪華同族の家を嗣ぐ家鳴門橋の畔にあり故に鳴門と號す釜鍋の冶鑄を業とす博學多識にして宿儒碩學も及ばざる所あり愛日園を開き日夕一小室に在て圖書を左右にし書生の如く酒を好み客を愛し飲膳豐美人と爲り磊落長者の風有り混沌社に入り千里駒と稱せられ名一時に顯る嘗て咏史の詩に捕

蛇朝下還城舞、却藥身終報國心の句あり人呼て小松内府とす天明八年戊午三月廿七日歿年六十七墓は茶臼山邦福寺に在り碑文は片山北海撰也

著述

論語徽旁通　毛詩字話　毛詩覽　田氏載筆　愛日園稿

鳴門茶讌の詩八首あり能く其趣を悉くせり什多きを以て愛を割て錄せず裝劍の一絕を賦す

裝劍

裝劍芙蓉劍、白蛇三尺氷、摩挲何所用、空遂筆端蠅、

河野恕齋

名は子龍字は伯潛通稱忠右衛門恕齋又雀皋南濱鹿門と號す父は岡白駒元と河野氏播磨網干の人也故有り岡氏を冒す肥前蓮池藩主に仕へ京師に住す恕齋幼にして穎悟四五歳能く字を書き書を讀み十歳にして詩を能くし神童の稱あり藩主參勤の途次召して書詩を試るに命に應じて立ろに成る主悅て厚く之を賞賜す稍長して其學大に進み經史百家より稗官小說に至るまで通ぜざるなく尤も文章に長じ筆を下せば頃刻數百千言を綴る名京師に振ふ推して繡虎と曰ふ肥後の藪孤山始て京師に游び恕齋の文章を讀み驚て曰世豈復斯る人有んや異日海内の文宗となる者子に非ずして誰ぞやと遂に親み交る時に恕齋年十六也恕齋沈深にして多智大志あり賈誼陸賈の人と爲りを慕ひ嘗て曰く學を爲し苟も之を事業に措く能ばざれは全德に非るなりと藩主新に立ち學を好み意を政事に注ぐ恕齋救弊の五策を献ず主悅び時服一襲と親ら免命金礪の語を書して賜ひぬ後參勤の途中大坂に滯留すること十餘日日々に恕齋を召して尙書を講ぜしめ講畢れば政事を尋ね問ひ其用ゆべきを知り遂に大坂邸の監察とし續て留守に進む於是て父子任を分ち別居す人皆之を榮と

す當時太平日久して諸藩の用度寢多く率ね市人に借て用を辨ずる事とせしが間々約に違ふて償はざるものあり市人諸藩を疑て輙く其需要に應せず恕齋其間に處して期約を嚴にして愆らず市人之を信じて貸貰通融し以て藩の用度缺くること無きを得たり或年國許よりの廻米八百石風波に遭て船沈沒せりとて船人證據の書類を携へて坂邸に訴へ出しが人皆之を信じて疑はず恕齋獨疑ふ所有り推訊六晝夜にして果して其詐欺を發見し急に同謀者を捕へ併せて贓物をも得たりしかば人皆稱して神明とせり職にある事十餘年國事の爲め東西に奔走すること數回藩主大に用ひんとするに際し疾に罹りて歿す安永八年己亥二月九日也享年三十七墓は下寺町光明寺にあり碑文は藪孤山撰也恕齋吏事の餘暇著述多し喜て文人と交る晩年程朱を崇尚し父と趣向を異にし劉向父子を以て自ら處る豪宕小節に拘らず賴春水目して雜霸と曰ふ恕齋擇ばず春水曰く獨其說のみならず其行を以てすと恕齋笑て辨ぜず又臨池を嗜み常に古法帖を摸するを業とす國朝法帖全部數十卷は表背裝釘皆夫妻にて之を爲せり割烹の如きも夫妻之を調理して其巧みなり温酒煎茶も皆家法ありと云混沌社課題國史を咏ずるは恕齋の發意にして哀然冊を爲すに至れり恕齋の句に丘壑豈藏規畫地、廟堂不屬寂虛人と一時傳稱して俊寬と呼べり又弱冠の時攀禽賦を作る當時佐賀藩主飼鳥を好み之を蓮池に分與して飼はしめんとす蓮池の重臣之を憂ふ恕齋是賦を作て諷諫す二藩主傳覽して感悟し悉く其鳥を放てりと云

葛蠡菴

名は張字は子琴蠡菴又小園と號す通稱は橋本貞元本姓は葛城大坂の人也世々醫を業とす蠡菴幼にして父母を喪ひ父の弟子碓井逸翁に保鞠せらる少より穎悟菅甘谷兄樂郊に學ひ好て詩を賦す弱冠醫を京師に學て

其精奥を極め海内を歴游せんとす逸翁可かず歸て業を治め逸翁を敬養奉事する事備に至れり而詩を好む益甚しく府下の諸名士と社を結て往來相驩し暇有れば佳山水を尋ね吟哦數日の游を爲す資性瀟散韻雅人と交て限界を設けず笑謔滑稽俗に近きが如きも富漢に諂はず貧窮に安んじ妻子和熟日夕吟咏を以て樂と爲す其詩清新婉約卓然一家を爲し子琴の名京畿に顯はるもと醫學に精しく又左氏傳に熟すれども謙虚にして問はざれば言はず問者皆其精到なるに服せり社友の會集するや或は談論を務め或は沈吟一二字に苦み或は過醉し或は事故あり篇を成さずして去る者多けれども蝨菴は飲酒笑謔の際に賦して缺く事なし或は二三篇に至る事あり而も字句巧緻にして一坐をして嗟嘆せしむ然れども少しく心に安からざるあれば詩會より歸り當夜枕上之を改删して往々曉に至り寐ざることあり詩成て後又正を同社に請ふ其心を用ふる想ふべ

し嘗て紀州に游び祇南海の子尚濂に逢ひ南海平生の事を聞て大に悅服し人に逢ふ毎に之を說けり蝨菴嘗て本朝人の詩文集を閲せず又詩を賦するに未だ嘗て韻書を檢せず若し之を問へは音字平仄響應せざるなし家は玉江橋の北に在り西南豁達月に宜しく雪に宜し樓を御風と名け毎年仲秋に至れば連夕讌詩を設け雪朝は夙く軒を開き簾を捲き酒を温めて客の到るを待てり又笙觱篥を善し篆刻に巧なり天明四年甲辰五月七日歿年四十六檜園詩老と謚す墓は天滿東寺町栗東寺にあり碑文は岡魯菴撰篠崎三島書也混沌社咏史會に蝨菴文公骾脇便逢害、智伯頭顱誰乞憐の句あり人呼て源典厩とす賴山陽の詩に茫々混沌新穿竅、唯有多才葛子琴の句あり遺稿小園摘稿、葛氏漫艸は其徒の集る所なりと云今其一小詩を載す

歲暮

養病安貧一畝宮、任他年與世途窮、詩詞驚俗竟無益、藥石爲醫較有功、異日丹成須試火多時篆刻且彫蟲、何人更識余初志、獨倚江樓念御風、

冬日游野寺

寒郊古刹樹蒼黃、幽徑無人午有霜、一局手談何處熟、山茶花下小禪房、

小山伯鳳

名は儀字は伯鳳半兵衛と稱す賣藥を業とす浪華の人讀書を嗜み和漢を網羅して其書皆奇僻山海經夷堅志を主本とし舶來の新書に奇僻怪異の者あれば必讀て之を記憶し之を叩けば響の應ずるが如し人目して怪物とす未だ弱冠ならずして多病安永三年十二月廿九日歿年二十五墓は谷町八丁目重願寺にあり賴春水碑文を撰し併て書す伯鳳春水が伏見探梅を送る詩あり仁德天皇昔上臺、三韓博士奏歌來、無何文物今寥落、遂使騷人遠問梅、著述

竹取物語抄　玉餘魚五　臆說辨二

左子岳

名は鳳字は子岳魯菴と號す通稱にも兼用す佐々木氏京師の人龍公美の門に學ぶ家もと豪富なりしが產を破て醫となる浪花に住す雋才にして詩又書を善す醫も亦卓識あり享和元年歿す魯庵詩集を著す

岡魯菴

名は元鳳字は公翼魯菴と號す又白洲澹齋の別號あり尙達と稱す河內の人大坂に住す幼より善く唐本を讀めり人稱して神童と曰ふ菅甘谷に學ぶ長ずるに及びて醫を業とす詩文を能し一篇出る每に人皆傳誦す江村北海魯菴の香橙窩集を見て古人の作として曰く句法格調今世の得易き所に非ずと魯菴爲人溫謹にして競爭せず妄に交游を爲さず家法嚴正なり嘗て書庫を造り左右に牖を設け机を中央に置き暇有れば架書を抽て

讀む人皆之を羨む又物產學を嗜み庭に小圃を開て藥艸を雜植す毛詩品物圖考、離騷名物考を著す片山北海の混沌社を結ぶや魯菴葛蠡菴と詩詞警拔を以て聞へ蠡菴は動もすれは纖巧に傷るゝも魯菴は能々地步を占むと云魯菴詠史に跡留楊柳路傍水、望入芙蓉峰頂煙の聯あり人稱して西行法師と云其詩の一二を擧く

十月五日游高雄

幽意千年寺、清音辨古鐘、鳥歸林景薄、烟合暮山濃、橡實拾相後、楓枝折且從
崎嶇未全下、鈎月在中峰、

高津春望

古都形勝入新年、浪華繁華氣象全、江海晴分雙滿雨、閭閻望合萬象烟、盡樓柳色青何處、沙岸梅花白幾邊、富庶於今推大邑、何須人擬黍離篇、

天明六年丙午十二月十八日歿年五十小橋墓地に葬る

加藤圓齋

名は矩直字は宗叔圓齋と號す通稱莊左衛門美濃の人也岡白駒に學て浪華に講說す深く時習の時文を厭ふて終身詩の贈答をなせしことなく專ら經義を以て任とせり清家古註本を校刊して世に行はる天明中五十餘歲にて歿す著述

周禮說筌　儀禮解箋　禮記鄭註補正　孝經鄭註疏釋
論語大疏集成　雜考

隱岐子遠

名は秀明字は子遠茱軒と號す通稱宇右衛門大坂城番の與力也實行の士能く義母に事へ歡を竭し野史稗官に通曉す當時大日本史未た民間に傳播せす觀者甚た罕にして正を取る所なし混沌社詠史の課題出るや皆子遠に就て質問せり賴春水大坂に在りし日尾藤二洲と伏見桃山に游ふ子

遠之を聞て從はんと請ふ二人船に乘て京橋に抵れは子遠旅裝して岸下に待てり當時與力の威權甚た强かりしかは舟人子遠を見て畏敬すること甚し子遠僕從を還して獨船に入り船中より伏見に着き桃山に遊ひ歸坂するまての間二人に奉事すること僕隷の如く以て曠歳の樂事として悅へりと其長者を敬し威權を負はさる尋常の人に非るを見るに足れり

其春日遊某氏別業詩

幽莊溝洫外、落日透林煙、啼鳥飛花裡、遊魚垂柳邊、青山行處在、白水自相旋野老休爭席、無人不可憐、

平壽王

名は九齡字は壽王通稱大畠宦兵衛播州明石藩大坂邸守なり中井竹山に學ふ竹山常に其詩を稱して梁蛻巖の遺韻ありとす其書初め甚た拙なりしか趙陶齋に學て俄然一變し前後二手に出るか如しと云其浦島行の詩一首を抄出す

君不見浦島太郎釣鼇處、釣得巨鼇化作女、情好婉嬿爲夫妻、蓬萊瀛洲携手去、珊瑚之枕玳瑁床、仙宮深處娛樂長、蘋藻巧結同心縷、漣漪細織合歡裳、雲車俱朝龍王都、赤螭後乘蛟前驅、水族波臣侍行酒能掌猩唇麟爲脯、虬笛鼉鼓舞馮夷、奇花珍禽若春時、可憐凡骨不可換、却似劉阮多歸思、夫妻把袂淚不晞、白玉小奩贐其歸、愼莫相開再相見、雲濤路分達海磯、自謂仙游未周歲、何知人間世代改、偶然長生駐紅顏、七世子孫復何在、江山無恙空予古、煢々浩歎失所怙、忽爾驚怪一開奩、白浪皺波滿眉宇、

飯岡義齋

名は孝欽字は德安義齋又澹寧と號す大坂の人世々醫を業となす義齋に至て業を改め儒と爲て生徒に授く初め十餘歳にして父母を失ひ自ら幼弟を撫育して備さに艱苦を嘗め二十歳の時鈴木貞齋に從學す貞齋其謹

篤を愛して提誨尤も厚し貞齋歿して後石田氏の心學を好みて立水坐雪なと云へる修行を爲して遂に其派に謂へる大悟徹底と云に詣りければ社中推して宿德として皆弟子の禮を執りにき義齋偶論語鄕黨篇を讀みて大に悟る所有り遂に舊學を棄てゝ程朱の學を治め弟子に謂て曰吾已に轍を改め尙舊徒を牽るは義に非るなりと謝して之を遣る生計頓に零落すれとも蕭然自ら守る事數年にして生徒復集り醇儒を以て稱せらる平居貧なれとも他の困弱を救ひ常に及ばざるが如し其事を斷する明決にして毫も滯吝ならす世に交り異を立るを欲せされとも亦流俗に狥はす隣近の男女少長となく愛敬せざるものなし嘗て曰性命の理は之を萬物の著に求め天下の事は之を一心の微に本つく若夫用無きの體は以て立つ無く體無の用は以て行はるゝなし體用相涵て後之を儒者の學と謂ゝと寛政元年己酉十一月八日歿年七十三小橋寺町龍淵寺に葬り賴春水墓銘を撰す今龍淵寺にある所の碑は面に義齋飯岡先生墓背に天明四年甲辰七月廿一日歿と記して他に文なし歿日の違ひあるは何故なるか春水遺稿寛政二年庚戌岳父義齋老人故居の詩に盧橘陰深漏夕陽荒庭弔影獨彷徨讀書幃寂人何在四壁唯聞遺墨香とありて其物故を去る遠からざるの意隱然たり然れば今の碑は再建等の事ありて年月を誤刻せるならんか男子なく弟孝鍾を以て嗣として醫を業とす二女あり一は賴春水の妻（名は靜子梅月と號す）一は尾藤二洲の妻（名は直子梅颸と號す）となる

早野仰齋　同反堂

名は辨三字は士譽通稱榮輔仰齋又大瘦生と號す大坂の人中井竹山に從ふ夙く母を喪ひ獨父と居り至孝能く其志を樂ましむ其父來り問て曰豚兒學業成るべきや否やと竹山曰子憂る勿れ士譽勤學倦ます學成るとも生計の貧なり易きを奈何せんと父悅て曰學業成らは何の賜か之に如ん

と仰齋懷德書院に在ること十四年清苦砥礪して手卷を釋かす旁ら詞藝を以て聞ゆ帷を下して徒に授く家道孔た治まり人を導く方あり酒を飲み醉て益謹む寛政二年庚戌三月廿七日歿年四十五墓は生玉寺町隆專寺に在り子正己字は子發通稱義藏反堂又流水と號す家業を嗣ぎ力學謹行を以て聞ゆ天保二年辛卯三月廿九日歿す墓は仰齋と同所にあり

林淡齋

字は玄說河州植松村の人也浪華に住し儒にして醫を兼たり小學俗解七卷を著す寛政三年辛亥三月二日歿年八十三墓は口繩坂東太平寺にあり

細合斗南　同張菴

名は離晩年方明と更む字は麗王通稱は八郎右衛門斗南又學半齋太乙眞人と號す伊勢河曲郡江島の人浪花に住す初め徂徠學を唱へしか後に一家言を爲し專ら清人考證の說を唱ふ書を善し書名高し常に家集を檢し改竄するを樂とし始と原稿を留めざるに至るものあり享和三年癸亥十一月六日京師に歿す年七十七黑谷にて荼毘し齒骨を三分して一を本刹別院墓地中生前建る所の碑下に納め一を甲山先塋に瘞め一を住吉郡法樂寺境內に埋め新に碑を建て斗南の先師蘭堂後師泰菴の名をも合せ記す斗南生前先後二師の爲め碑を建るの志あり未た果さずして歿す故に嗣子方義父の志を繼て之を爲すと云著述

周易說統　書說統　論語啓發　孝經闡旨　詩說統
三經二義　淡水集　詩問　百家詩話抄　濟勝具
樂府節律　三逸稿　青山集　選唐詩來　南遊獨語
南遊草　東遊草　北遊草　小草詩筐　神風集
後神風集　學半齋文集　合子天明後稿　隱居放言

其詩は

贈賣茶翁

有髮僧形古、陌東屏跡偏、五山高法臘、六祖遠心傳、當逕松爲塵、伺門竹若椽、風旗疑酒肆、霜葉認茶筵、好事他新識、清談是宿緣、寧無博士著、不計老婆錢、朝采梅峰種、夕和鴨水煎、候湯誰聽雨、赴昇自薰烟、本產蓮池玉、尙通雲閣仙、飲中知淨理、一味澹參禪、

謁徂徠先生墓

小雨蕭々白日寒、三田墓樹幾摧殘、孤碑長托長松寺、猶作徂徠山上看、

張菴名は牽字は長彌又元達通稱は三彌張菴と號す斗南の長子なり幼より聰慧にして詩文を善し神童の稱あり平生多病僅に十八歲にて歿す遺文を編輯して小郡詩囊と名く又迂園子話一卷あり皆世に行はると云

福承明

名尙脩字は承明父を剛と云ふ字は百錬醫を浪花に爲す承明幼にして穎異長ずるに及び才子の稱あり年三十四父に先ちて歿す映山漫稿を著す其詩一首を擧ぐ

兼葭堂集

相逢湖海上、交熟任吾疎、人醉三春酒、家藏萬卷書、繞樓山色秀、傍水月光虛、招隱非難賦、幽情本有餘、

西村孟清

名は直字は孟清通稱仁右衛門浪華の人鳥山崧岳門人なり其詩一首

自中濱還家舟中作

客散清江放小舟、金波的皪月中浮、漁家一曲添佳興、直下秋風十里流、

井坂雲卿

名は廣正字は雲卿松石と號す六郎左衛門と稱す著に松石遺稿あり其詩

幽居

山郭蕭條深掩門、身閑境靜樂田園、幽花折得猶含露、嘉木移來耐託根、圖籍
簞瓢能養拙、雲烟泉石好忘喧、草堂日暮無人到、井上梧桐月一痕、

岡田君章

名は豹字は君章善次と稱す號は靜　阿波藩大坂邸の吏詩及書を嗜み篆刻丹青皆巧なり又射劍の術に達し旁ら箏臂篥を能す官舍狹隘なれども書畫硯席及び武器を安排して位置大に趣あり後國に歸り擢られて學職と爲る中村惕齋の學を修む著に半間園遺稿あり其詩一首

同諸子游西孟淸中濱莊

鞅掌常違社裡游、名園此日暫相留、駒山蒼翠供過客、猫水潺湲好泛舟、園墅
林花春歷亂、隔村野竹晚淸幽、烟霞醉飽飛揚甚、擬以形骸附一邱、

赤松春菴　男越智高洲

名は惟義字は子方本氏は越智播磨の人少時鄕を去て河內に居る後大坂

に徙り醫を業とす常に性命を談し道學を以て自ら居り詩文を作らず人と爲り朴實知ては言はざるなく見ては規せざるなし自ら謂ふ直情徑行巧みに交游の間に俯仰すること能はずと最も尾藤二洲と善し常に言ふ吾晚年道學に志して造詣する所なし幸に男子有り吾の志を繼がしめんと欲す醫は富易く儒は貧なり易し然れども吾父子の生計に拙き醫儒なんぞ異ならん醫に餓るよりは儒に餓んと其子を二洲に託す賴春水大坂に在りし時臘月廿九日天滿に失火數百戶を延燒せり新年となり客の來るもの火災を語らざるなし春菴來るに及び直に中庸某章の義を論じて曰今片山北海を過て之を論じ吾未だ服せざるなり談論風生一語も火災に及ばず

男翼字は士亮越智文平と稱し高洲と號す帷を下して敎授す文政九年丙戌四月四日歿年五十六墓は小橋梅松院に在り

山口剛齋

初の名は純實後景德と改む字は正懋剛三郎と稱す大坂の人性豪邁少き時任俠を好み且禪敎神學を修む後節を折り飯岡義齋に業を受け又久米訂齋(順利)と交り道學を講究し學問該富にして益精微を極む其の書を講ずる辨說明晰間新意を出して必しも舊套に沿はず聞く者倦まず又越後兵法を修めて蘊奧に抵り兵錄を著して其要領を記し又古甲冑の鑑定を善し戎裝の式に至るまで熟練せざるなし火技をも考究すれども貧にて試むると能はず且府下發砲嚴禁あれば私に其技術を試むるを得ず土佐の人谷萬六剛齋より其法を授かり國に在て之を試み其精妙に服せりと剛齋姿貌魁梧聲鐘の如く而して資性謙卑時に或は豪宕音吐骨格宛も武士の如し然れども風流閑雅詩文和歌及和文を善す性酒を飲まずと雖も言談風生時々笑謔を雜へ醉人の如く然り始て大坂に帷を下し徒に授る

時貧甚し客訪問するものあれば〝居を以て之を謝拒す後石州津和野龜井氏に仕ふ服部栗齋(字佑甫長沼流兵法を修す)常に歎じて曰山口剛齋兵を講ずる屢其事を經る者の如し大叩小叩吾竭す能はざる所なりと

平賀中南

初名叔明字士亮後晉民と改む字房父通稱總右衛門藝州忠海の人幼より土生氏に養はる廿歲にして學に志せしも寒驛にて師とすべきなし獨自ら苦學し躬に賤業を執りながら十三經廿一史を繙閱せり義父歿するに及び三年の喪を行ふ鄉人皆之を恠みしが後遂に悅服す女子有り土生氏同姓の男子を迎へて之に妻はせ家を讓り身は本姓に復し長崎に游び後京師又大坂に住す著書を以て志と爲せり松平伊豆守稱して好古先生といふ歿年詳ならず墓は茶臼山邦福寺にあり其詩

宿田城

客裡逢秋又遠行、蕭々白髮坐來生、西風影冷他鄕月、更聽寒砧處々聲、

高安蘆屋

名は昶通稱莊次郎蘆屋山人と號す浪華人流蕩落魄傭書を生業とし身垢衣を著妻妾なく善く老父母に事へて歡心を得和漢年契、都會節用集を著す性放誕にして動もすれば無根の話を造て人を騙し或は筆記して世間に傳播す人就て之を質せば笑て答へず更に一新話を出して其人を悅ばしむ賴春水の如きも數誑かれて後之を覺れり因て人に語て曰高生の虛誕を吐くは客に茶菓を供するが如しと衆人以て信に然りとせり

湖山南濤

名は晃字は廷美南濤と號し尙善と稱す土佐の人伊藤東涯の門人小說學に名あり大坂に敎授す

牛尾旗峰

名は德言字は子行加門と稱す播州の人浪花に住す

岡芸臺

名は施國字は賓王久次郎と稱す浪花の人其詩

某園小集贈主人

風樹黃飛秋雨後、松牕翠欝暮煙前、鍊丹心在彈冠外、相値相憐湖海邊

內山栗齋

名は之明字は藤三藤藏と稱す播州の人大坂西町奉行組與力にして天滿に住す探勝艸を著す其詩

還鄕作

山驛看花過、歸鄕標有梅、光陰都如此、不恠鬢華催、

春日感慨

同僚官舍接軒隣、花木抄高欲競春、蛺蝶不知離落隔、隨風來去自相親、

岸畑季英

字は芳洲浪花の人岸翁遺稿あり

寒山

千峰懸夕麗、一室翠微中、谷邃容歸鳥、野悠迷牧童、飛泉雲外響、清梵坐邊通
古寺寒山裡、蕭然塵慮空、

武谷泉

字は子龍六甲山人と號し雲菴と稱す浪花の人其詩

夏日村居

午枕陶家興、小牕對素秋、三杯甘薄酒、五月任披裘、雨意蛙聲亂、夕陽螢火流、
村居只偃蹇、孰與一沙鷗、

夫婦池

伉儷玆同死、至今人斷腸、盈々池上水、泛々兩鴛鴦、

早苗三寧

江州の人浪花に住し醫を業とす

題壁

風雨千山暮、乾坤一葉秋、悲哉難作賦、率爾易生愁、天未家書隔、世間友道休、
范張終不至、雞黍爲誰求、

鈴木格

字は仲舒壽伯と稱す浪花の人醫を業とす

舟中晩望

帆外水煙白、凄其殘月孤、舟船何處所、遠江互相呼、樹斷雲縹緲、岸迥山有無
曉鐘聲僅落、霞彩照平湖、

田中遜之

字は志文箕山と號す通稱善兵衛大坂の人

五日游禪林聽諸子奏樂

五日蓮華社、相携訪遠師、罄歡時弄管、續命那須絲、淨境塵心息、妙音天樂疑
淵明不解律、對酒獨攢眉、

友淵宜卿

字は伯明浪花の人詩を蛻巖に學ぶ南江遺稿あり通稱庸節醫を業とす

同友人海寺觀花

雨洗江天綠欲流、花開海寺愜春游、園非桃李皆群芳、路到蓬萊第幾州、萬里
潮聲懸殿遠、雙林晴影湧臺浮、野芳休問王孫艸、山色遙牽仙客舟、

倉温

字は伯玉滄洲と號す俗稱元昌浪花の人詩才あり

晚秋對月有感

寒林蕭瑟白雲秋、乘興獨登江上樓、風急金天楓葉下、月明銀漢露華浮、笛中
楊柳添鄉思、杯裡葡萄緩客愁、吟罷三更人不見、霜飛十里荻花洲、

原含

字子章幼より詩文を能す死年僅二十浪華の人

不寐

燈影暗無焰、更深未就眠、吾非千里客、何事坐凄然

楢林榮廸

字は伯啓榮節と稱す浪花の人醫を業とす

寄答屈子幹

搖落江天雁影流、遙憐庾亮倚南樓、故人元自無長物、爲贈白雲一片秋

田早胤

字は公質浪花の人醫を業とす

中秋新晴

宿雨新晴海上山、雲間明月破愁顏、西風獵々吹衣袂、多少樓臺共欲攀、

和藤周齋見寄韻

索居屈指十餘霜、日々相望天一方、應是龍田紅葉好、知君錦繡滿詩囊、

石文瑩

字は子龍桃陽と號す浪花の人鳥山崧岳門人

菱川岡山

名は賓字は大觀岡山又秦嶺と號す通稱右門浪花の人後藤芝山に學び講説を業とす後江戸に赴き佐倉侯に聘せられ儒員となる享和三年癸亥七月九日歿年五十三一に五十六其著述

正名緒言　岡山史鈔　在京寄談　東平東筆　秦嶺館漫筆

秦嶺館文艸

片岡子蘭

名は芸字は子蘭字を以て行はる又片岡を修して岡とす芸香亭と號す通稱淀屋十郎右衛門(一作十右衛門)浪華釣鐘町に住す博通を以て聞ゆ芸香亭漫錄、岡子蘭文集を著す安永天明年間の人

藤田恭菴

名は爵字は蔚宗浮均と號す大坂に住す旁ら物產學を戸田旭山に學ぶ

原斗南

名は存之字は子希斗南と號し義助と稱す京師の人中井甃菴に學ぶ浪華懷德書院の助教たり理學發揮、斗南稿を著す

由良箕山

俗稱孫兵衛豊後の人徂徠學を以て浪華に敎授す後堺高三氏の家に於て文化三年丙寅五月廿四日歿す年六十八同地顯本寺に葬る麗藻四卷を著す

岡島龍湖

名は樗字は櫟夫羽州秋田の人皆川淇園に學び浪花に住ゞ文化四年に歿す年三十七下寺町正覺寺に葬る周易及學庸を註す

都賀庭鐘

名は庭鐘字は公聲大江漁人と號す通稱は都賀六藏浪華の人儒醫を業とし書畫を善す木村兼葭と交り物產學を修め又小說稗史を作り戲號を近路行者といふ寛政年中に歿す其著す所

大江漁唱　莘莫館隨筆　物產緒言　明詩批評　狂詩選

戲作八英雙紙　繁々夜話　垣根艸

十時梅厓

初名は業字は季長後に名を賜字子羽と改む通稱は半藏梅厓と號す又碩亭夢軒の號あり浪華の人也伊藤東所に學び經義を以て稱せらる初書法を大谷永菴に學て其蘊奥を究む故に其體を書すれば青蓮院宮門屬と署せり後趙陶齋に從ひ書法を受く長島藩主增山氏(名は正賢河內守と稱し雪齋と號す)大坂城番たりし時屢陶齋を招く梅厓之に隨跟して其邸に至り因て增山氏の知を蒙り遂に仕ふる事となれり天明四年從て長島に之き建議して學校を興し文禮書院と云ふ梅厓院長と爲り待遇殊に厚し後進て郡宰となる梅厓性酒を嗜み磊落奇偉にして言語快活時に諧謔を雜ゆ世人目して狂とす終に世と合はず寛政二年數月の暇を乞ひ長崎に游び淸人費晴湖陳養山と交り六法を晴湖に問ひ筆法を養山に問ふ養山曰古來書家把筆懸針必懸腕を須ゆ今先生の用筆懸針法を得たりと遂に留ること數旬詩酒相歡び贈答の詩文裒然卷を成せり歸途浪華を過り舊知を訪ひ遍く近畿の名勝に遊ぶ時に泉州佐野の豪富食野靑圃學を好み書畫に耽る梅厓を見て大に喜び日夜相親み水魚の如し因て留ること月餘遂

に歸期を愆る既にして藩に歸るに及び有司責るに犯法を以てし閉門蟄居せしむ會ま藩に金の入用ありて之を食野氏に謀る氏曰貴藩の十時半藏を借る事を得ば金の事惟命に從はんと群議して梅厓を赦し物頭格として優待し佐野に往かしむ是より梅厓遂に食野の上客となり專ら筆墨を命として其藏幅書畫法帖を臨撫し技大に進む又篆刻を善し自用の印は率ね手刻す數年にして復藩に歸る寛政十二年の春致仕して浪華に歸隱し細合半齋、木村蒹葭、米山人、僧少林、濱田杏堂等と詩酒書畫を以て日に往來す文化元年甲子正月廿三日歿年七十二或云五十六八丁目寺町正念寺に葬る法號和敬院謙翁梅厓居士碣を建てず男順字は伯祐梅谷と號す通稱五介後禎齋と更む長島藩に仕ふ父の風を繼ぎ書畫を能くす墓は父と同所に在り梅厓著述

天臨閣娛觀　碩亭書畫譜　梅厓集鈔

其詩

傳芳平氏所藏畊圖古淡可觀焉作歌以贈

世人但識平氏豪、雅士却欽好尙高、米舫書畫雜五車、就中最賞豳風圖、何人巧思丹青手、春秋光景滿村居、田畯來喜東作急、布穀一聲勸耕鋤、次第吹過麥浪風、三耘綠兮梅雨中、婦兒餉後夫力前、秋成共慶遭有年、塲圃洒掃困倉滿、擧酌兒觥意暢然、平君卷軸多藏祕、殊愛此圖有深意、周公聖人猶勸農、況乃士庶忘預備、余展此圖有感心、聊揮吟筆告知音、

奥田拙古

名は元繼字士秀拙古又仙樓と號す通稱は松齋播州の人本姓那波氏妻の氏奥田を冒す少して兄魯堂と同じく京師に學び後大坂に住し程朱學を以て生徒に敎授す晩年左傳評林を著す是其尤も好む所なり其他著述數種浪華に建る所の碑碣此人の撰文多し生前一心寺境内に墓所を卜して

自ら碑文を撰す文化四年丁卯八月十二日歿年七十九著述

増訂左傳評林　左傳捷覽　左傳釋例稿　定本大學

左右指掌　滅魔燈　十二律考　赤城梅花記

雨好餘話　清詩選　仙樓文艸

桂田龍山

名は棟吉其先近江の人父名は棟政學を好み庶子を以て大坂に卜居す大坂府庠の興れる時與て力有り龍山性來多病醫を業とす寡欲質實古を好み濟世の志あり節儉自ら守り帛を衣す食は味を重ねず家に長物なく餘財あれば書を買ひ人に施す殆太古の風あり照類通義元和餘慶年中行事を著はし未だ稿を脫せず文化七年庚午二月十日歿年六十二墓は小橋寺町天照寺にあり

篠崎三島　同小竹　同竹陰

名は應道字は安道號は三島又郁洲梅花堂の號あり長兵衛と稱す大坂の人也菅甘谷に學びて詩書を能し旁ら天文卜筮音切騎馬術の如きも皆能く通曉せり爲人濶達にして事を處する明快人と言ふに回避する所なし初め其父伊豫より大坂に移住し家富みたりしが三島義を好み財を輕し屢人の急を救ひ遂に家產を落せり嘗て某藩に金を貸せしに凶歲にて約の如く償還せず吏又金を掠めて亡命せり藩主吏を搜捕して罪に行はんと欲す三島之を聞て曰金還るの道なくして人を殺す益なしと遂に償を求めず年四十始て儒業を開く生徒多く集る後書を求むるもの多きが爲め收入稍裕かなり乃ち舊宅を買收して曰之を以て先人に謝すべしと文化十年癸酉十月三十日歿年七十七墓は天滿東寺町天德寺にあり子なし二子を養ふ一は近郊の里正となる一は小竹其傳次にあり三島の著述

碧紗籠集　草彙　論孟述意　放言

郁洲摘艸　　浪華風雅

其詩一首を擧ぐ

留別諸子

大江西盡水連天、滄海帆檣落日懸、高閣他日窮目去、故人行在白雲邊、

小竹名は弼字は承弼小竹又畏堂又南豐と號す通稱長左衛門本生の父を加藤吉翁と云ふ豊後の人大坂に寓し醫を業とす小竹は其仲子なり幼にして穎異讀書を好み三島に從ひ業を受く三島之を愛し養て子とす專ら家學を修め東西游歴して徧く山水人物を訪ひ才思年と共に長ず三島謂ふ汝の才學已に具はれり乏しき所は見識のみなりと小竹因て洛閩の書を讀まんと請ふ三島之を可とす時に江戸の學政一新す小竹再び東游せんと欲すれども三島の許さゞらん事を恐れ竊に家を出で東して古賀精里に從ふ三島慍容なきのみならず書を精里に寄せて依託す精里小竹を

遇すること甚厚し既にして速に歸養するを勸む因て未だ半歳ならずして大坂に歸る父に代て教授するに及び經義朱子を宗とす文詩を作るに甚剋苦せずと雖天才秀拔にして人多く傳誦し書も亦流麗雅健之を乞ふもの甚多く其名海内に傳はる爲人濶達灑にして身體長大音聲大きく低語するを喜ばず事務に通達して書生迂疎の習氣無し然れども仕官を好まず其言に曰く吾國君臣の道甚嚴にして一たび仕ふれば身は束縛を受けて一進一退其意を盡し言ふ能はず我に損ありて彼に益なし如かず賓師となりて進退己に任せ直言讜議顧慮する所無にはと諸藩主の大坂城を鎮戍するもの多く聘して師とす最も安中城主板倉氏の知を受けたり又淡路稻田氏深く信敬して賓師として廩粟を餽り大阪に來れば其邸を舍て篠崎氏に止宿せり小竹門戸の見を持せず廣く天下の士に交り坐客常に盈てり酒を好み善く笛篳篥を吹けり嘗て自ら其肖像に題して曰貞

不絶俗郭林宗、和而不流柳下惠、不爲鄉愿不爲甚、欲以平生了百歳、其志す所見るべし嘉永四年辛亥五月八日歿年七十一墓は三島と同所にあり齋藤拙堂碑文を撰門人吳策書題表は野田笛浦也男子なし江戸加藤氏の季子公槩を養て仲女を配し家を嗣かしむ

竹陰名は概字は公概竹陰又訥堂又武江と號す通稱は長平江戸の人加藤氏初め古賀侗菴に從學し後大坂に來て小竹の門に入る小竹養て子とし妻はすに仲女を以てす天性不羈磊落にして物に拘はらす毀譽褒貶の聲四集するも恬として意に介せず平常酒を好て談笑日を送れり後妻を喪ひ常に北里に遊ひ遂に妓を落籍して後妻とす人評して儒家の擧動にあらずとして往々之を議せり安政五年戊午八月歿年五十餘墓は小竹に同し竹陰の詩の内其大阪に係るもの數首を載す

高津

遠仰聖明仁德朝、高臺歌就祝豐饒、炊煙不絶千年後、十萬人家一百橋、

大坂城

木下人爲天下君、威名遠向外夷傳、層城萬仞凌霄漢、遙指朝鮮八點雲、

過道頓堀戲書

月旦不知誰擅場、招牌高揭姓名揚、老來無復少年態、唯記老俳團十郎、

賦浪花冬景

上店密柑從紀州、風吹帽子冷江樓、皷鳴街上狻猊舞、燈點橋邊蠣蛤舟、

劉琴溪

名は元高字は伯太琴溪と號す藝州廣島の人大坂に住して敎授す文政七年甲申三月二十日歿年七十三墓は福島妙德寺にあり靜文館詩集を著す

武内確齋

名は温字は子玉確齋は其號通稱西右衛門浪花布屋町に住す篠崎三島の

門に學ひ詩及篆刻に工なり確齋職町代たり町代は町年寄に隷屬して町中の事を幹し甚た賤しと雖概ね子孫世襲するを以て惠恣の徒多し確齋其徒と伍せす能く其職分を守り人其學殖を以て待つに先生を以てすれとも依然町代を以て自ら處し敢て傲らす後職を養子に傳へ隣坊に卜居す從學者益多し町奉行齋藤氏迎へて其子を敎へしむ性酒を嗜み諧謔交道甚だ廣し旁ら小說を好み小說室八島を著す畫本玉藻譚阿也可志譚等も此人の作にして岡田玉山の名を以て世に弘む文政九年丙戌十二月廿五日歿年五十七墓は小橋寺町傳長寺にあり碑の題表は賴山陽にて誌は篠崎小竹撰文なり

三村崑山

名は其原字は子逢崑山又玉來と號す通稱貞藏浪華の人中井履軒に學ぶ文政八年乙酉六月十九日歿年六十四墓は下寺町萬福寺にあり

齋藤鑾江

名は象字は世敎通稱は五郎阿波德島の人也家世々商業を爲す鑾江初め那波網川に學ぶ二十五歳の時江戸に行て昌平黌に入り古賀精里侗菴父子に學び益淬勵して同儕の服する所となる既にして兄歿して家道甚艱み負債多くして姪尙幼し鑾江歸て姪を助て自ら家政を負擔し十餘年にして負債盡く償ひ畢り家政を姪に還して浪花に出て生徒を集めて敎授生業を爲し一錢尺帛宗家の助を假らす後宗家產傾き家を整理すること二回其產を復せしむ平素酒肉を用ひされとも親懇至れは必酒食を具へ親戚の急を告るものあれは束脩の餘を以て之を濟ひ毫も德食なし晚年家產衰へ婢僕を畜はす自ら門戶を洒掃し妻は薪炊を執り薄衣菲衣晏如たり性怛率に外迂濶に類すれとも內識略あり嘗て謂ふ晚學日足らすと門を閉て著述を事とす每に曰く百卷の書を著し五郎入道正宗の刀を獲

は吾事足れりと果して其言の如きを得たり嘉永戊申八月十三日歿年六十四墓は濱村墓地にあり野田笛浦碑文を撰す著述

四書叙旨十六　五經志疑四十　左傳說五　國語評六
史記文評十五　莊子文評二　八大家文法四　唐詩發揮四
明清六家文法六　歸鋏錄二　文集

渡邊長城

名は積字は眞卿號長城通稱文平後に東左衛門と更む阿波の人篠崎三島に學び浪花に敎授す隱居人と交るを好ます文政十年丁亥三月廿八日歿年五十七臨歿詩に云

五十七年不知年、閑窓枉過月花春、不才多病無成業、天下負吾吾負天、

墓は小橋寺町傳長寺にあり篠崎小竹譔誌

春田横塘　同壺處

名は有則字は有物横塘又海老と號す俗稱仁左衛門又尙平泉州岸和田の人本姓土生故有りて角野を冐し又春田を冐す大坂に出て生徒を敎授す嘗て曰閏月は歲時の贅なり人も亦贅業無るべからずと乃ち閏月毎に十三經を手抄し三閏月にして竣る爾後閏月毎に必ず業有り文政十一年戊子八月九日歿年六十一子なし岩崎氏の子厚生を養ふて其業を傳ふ著述遺稿四十卷詩一萬首文三千篇墓は口繩坂淨春寺にあり

壺處名は厚生字は和仲初樟島と號す俗稱弟四郎横塘の養子父業を嗣て敎授す

兼康百濟

名は元愷字は孟美浪華の人世々醫を業とす百濟に至り篠崎三島の門に入り業を改めて儒となる篠崎小竹、藤井裕齋、廣瀨筑梁、奥擅橋と同年を以て生れ皆業を三島に受くるを以て最も相親む浪華詩話を著す嘗て竹に

題して自酒を戒る詩に曰く

愛此碧琅玕、使人肝膽寒、一年一回醉、所以得平安、

廣瀨筑梁

名は履道字は公坦筑梁は其號なり浪花の人篠崎三島の門に從學す詩を好み律體を善す篠崎小竹武内確齋と朝夕往來兄弟の如く文詩講習の外風月勝事同遊せさるなく吉凶家事相謀らざるなし天保十四年癸卯十二月廿一日歿年六十三遺命して小橋傳長寺確齋墓側に葬る誌銘は小竹撰並書なり

八木巽處

名は廸字は孟率阿波の人浪華に住す清香書屋と號す通稱兵太儒業の旁南畫を能す山水花卉に工なり天保七年丙申七月八日歿年六十六墓は小橋大應寺にあり

藪鶴堂　男長水

名は平字は大平通稱平三七十後平叟と改む淡州福良の人浪華に住し儒學を以て名あり嘉永二年己酉十月朔日歿年七十七墓は小橋梅松院にあり男長水畫を以て名あり慶應三年丁卯四月廿五日歿墓同所に在り

香川琴橋

名は徽字は公琴通稱一郎琴橋と號す藝州の人北川氏幼して父五介に從ふて大坂に來る香川子硯の養子となり能書を以て家業を繼ぎ劉琴溪に從學して敎授し名聲一時に振ひ徒弟塾に滿ち城番米倉氏町奉行戸塚氏招請して子弟を敎授せしむ嘉永二年己酉十月十八日病歿年五十六墓は天滿西寺町蟠龍寺にあり碑文は篠崎小竹撰並書琴橋の詩

茶臼山

此山可仰駐神營、二百餘年天下平、颯々清風吹不絶、松聲乃是凱歌聲、

安治川釣遊

荻蘆連海海門開、遠近把竿舟溯洄、晨出昏歸八九月、無人不謂釣鯊來、

佐々原梅操

名は宣明字は君明幼時久吉と稱す後數馬と改む梅操の號は有栖川親王手書して賜はる所なり又衡明璠璵の四字を手書して賜ふ以て堂號とす又衂軒の號あり大坂伏見町の人なり其母旭日を夢みて姙む生て靈慧二歳にして字を識り之を書く初め春田古處に學び尋て藤澤東畡の門に入る七歳にして詩を賦し文を屬し草書を善す當時神童を以て稱せられ王公大人爭うて之を延見し文詩を作り字を書かしむ親王手書の賜も之に依れり其文詩を作り字を書する恰も大人の如くなるも畢れば母の膝に倚り乳を弄ふこと平常の小兒と異なることなく時としては如何に諭せども席上にて何事をも爲さゝりしことありしといふ十歳に及ては和漢の

經史天文易學等の大義に通せり土州藩之を祿せんとするに業未だ成らさるとて辭して就かず十三歳江戸に赴き佐藤一齋の門に入り三年を經て大坂に歸る人と爲り容貌秀て眼光淸く色温にして氣鋭口訥にして筆敏博聞にして强記なり町奉行川路左衛門尉其名を聞て屢招て與に語り大に之を奇とし謂て曰天かゝる大才を賜ふ大業を以て對へざる可からず勗めよと任滿るの日同行し江戸に歸る遂に業を淺草に開て敎授し安政二年乙卯の春大坂に歸省して其父六十の賀筵を開き續て大坂に止らんとせしが會ま增上寺の僧侶迎へて文學の師とせんとす故に江戸の門人頻に歸を促し遂に復東行せり實に歿前二月なり妹の近邊に嫁せるあり東行の前其家に至り別を告げ語て曰今度行かは復返らざらん去る夜の夢に「故里に六十の親を置ながら身は武藏野の露と消え行く」との和歌を讀めり豈凶兆にあらずやと聞者以て心に止めざりしが訃音を得て茫

然たりしと此年十一月廿一日淺草の僑居に歿す享年二十二未た娶らず子なし門人相議して其地願壽寺に葬り遺髮を大阪に送る之を北野善通寺なる其母の墓側に葬り碑を建て東畯文を撰す著書は大日本通史十五卷皇朝資治通鑑長篇三卷本朝年系二卷にして皆未完の稿たり此餘漫筆十三卷詩文和歌合集十五卷ありと云世に傳へ云梅操才を恃み餉の頭を打しことありと虛實未た詳ならず又其母の碑面は梅操が十歳前後の時書きしなりと

奥野小山

名は純字は温夫通稱は彌太郎大阪瓦町の人幼より學を好み業を篠崎小竹に受け安藤秋里、橋本香坡、加藤訥堂と篠崎門四天王の稱あり旁畫を森徹山に學ひ能樂を小松原新右衛門に學ふ後專ら儒學に心を潛め業成て子弟に敎授す三上藩主遠藤氏に仕へ大阪の邸守たり天資豪邁詩文に長

ずれども偏執の癖あり小竹の歿せし時葬儀の事より香坡等と議論合はす遂に會葬せざるに至れりと安政五年戊午八月廿日歿年五十九墓は天滿西寺町圓通寺にあり小山堂詩文抄を著す

山口陸齋

名は之謙字は君享淡州福浦の人也賴山陽に學ぶ天性素朴學和漢を究むと雖も不幸にして世に用ひられず常に衣食に窮せり大阪高津町に寓す一日人あり來て贄を納れ敎を乞はんとす時に陸齋自ら飯を炊きて食ふ家素貧して飯櫃無れは竈の前に立て釜より直に飯を盛りて食へり贄を執るの人之を見て大に驚き匆々辭し去りて復來らすと後福浦に還り安政六年己未七月病歿す年七十三

後藤松陰

名は機字は世張通稱春藏松陰又春草と號す美濃の人賴山陽に從學し才

子の稱あり學成て大阪に敎授す元治元年甲子十月十九日歿年六十八墓は天滿東寺町天德寺にあり松陰亭集を著す

藤澤東畡

名は甫字は元發東畡と號す讃岐安原の人也中山城山に從ひ徂徠學を受け後長崎に遊ひ支那語を學ぶ浪華に住み徂徠學を興復するを以て任とす從學者多し尼崎藩延て寶師とす嘉永壬子の秋高松藩擧て學官とし其浪華に住すること故の如し元治元年甲子春藩主に從ふて京師に至る時に德川大將軍二條城に在り其名を聞き召して謁を賜ふ藩主之を榮とし賞するに時服白金を以てす此年十二月十六日病歿年七十一著述若干墓は生玉齡延寺にあり其晩年時風に隨ふを傳ふるものあり東畡慨然として一詩を賦す其詩に曰

闕里文章衆說遷、吾曹所守有師傳、如今豈爲非譽動、一片丹心七十年、

橋本香坡　藤井藍田

名は通字は大路通稱半助香坡靜菴毛山の號あり又戴盆子と號するは其額の突出せるよりして戴盆何以見天の語を取て號とせるなり又戲に程方珍と署せるは出額の俗語に依れり上野沼田の人なり父を紋左衛門といふ香坡爲人洒落にして善く飲み善く罵る少時浪華に遊び篠崎小竹の門に入り四天王の一に算へらる攝州伊丹に在て敎授する事數年復大坂に住し傭書して自給し其宅極めて矮陋なり或人其門戸を大にして技を售らんことを勸む香坡笑て曰吾常に京阪諸儒の邊幅を修飾して衒賣するを醜しとす豈尤めて之に傚はんや世若し我を知るものならば門戸の高低を以て我を輕重せざるなりと竟に聽かず元治元年甲子の秋京師の騷擾あり幕府より尊攘を唱ふる者を捕ふること甚だ急なり然るに香坡幕府が天朝を蔑視するを惡み醉へば則罵て曰鼠賊大義名分の紊る可

からざるを知らずして暴横なり誅せざる可らずと聽者皆耳を掩ふ會ま其親友藤井藍田長藩と通ずる事顯はれて捕へられ香坡に連及す幕吏香坡を捕へ既にして之を釋す藍田の家を搜索するに及て香坡が時事を議するの手書を得復之を執へ大阪の獄に囚ふ遂に翌乙丑夏獄中に瘦死す詩あり後に記す香坡の大阪に在りし時其友安藤秋里歿後家貧して支ふ可からず香坡書肆龍草堂の主人淺井吉兵衛と相議して各其遺孤一人を養へり其人倫に篤き見るべし香坡歿後龍草堂其西游詩稿を得て刊行し其舊故に醵して追祀の典を擧行せり其義俠亦稱す可きなり

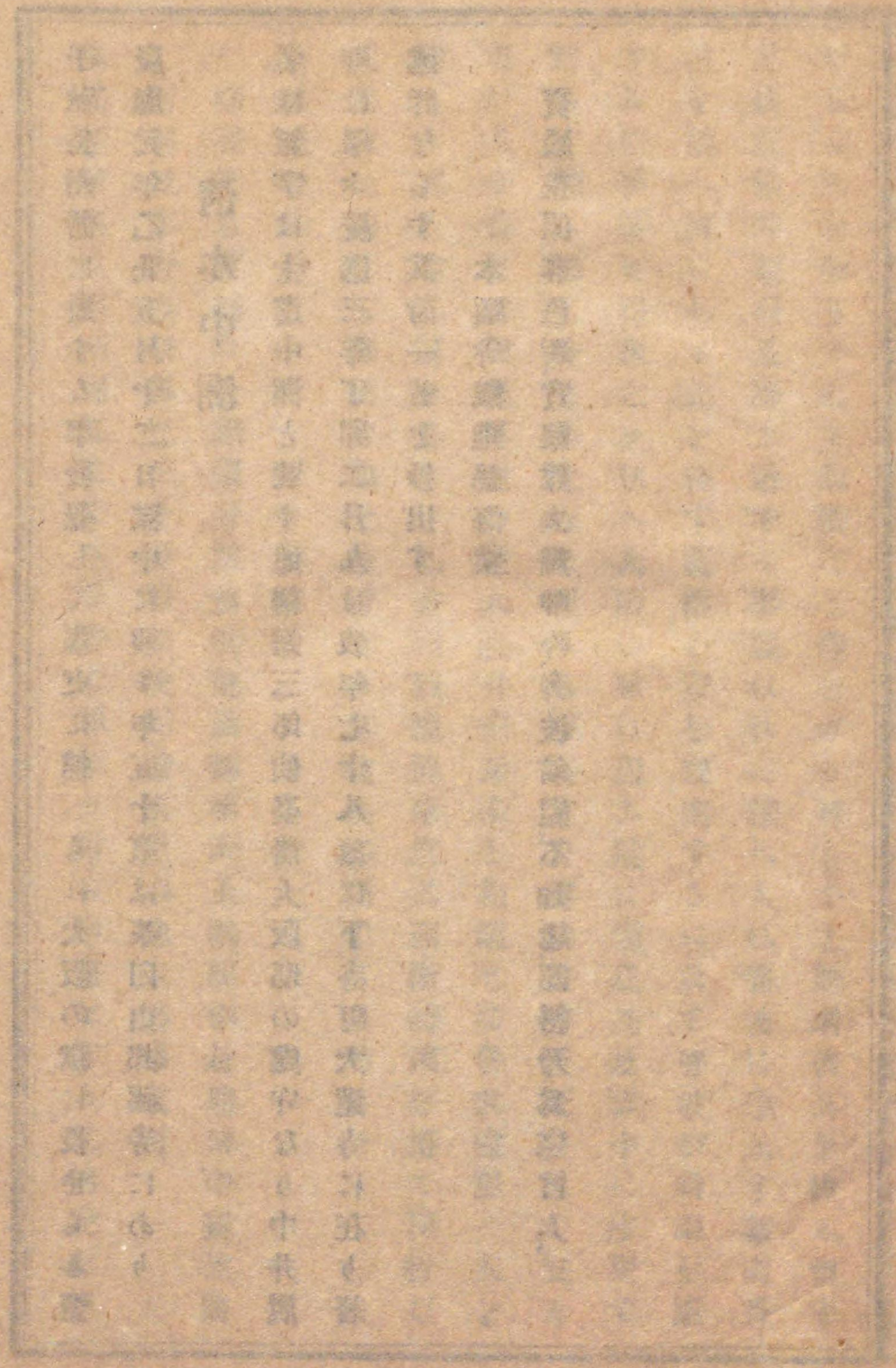
香坡獄中の詩

棒聲暫息夜凄々、憂國傷身頭自低、幾歲舞雲天上鶴、明朝赴鼎傳中雞、徒將宿志投冥府、無奈孤兒托小妻、悵望湊川纔百里、幽魂未必惑東西、

藤井藍田名は德南堀江に住み習字の師たり旁ら南畫を作る元治元年甲子秋長州藩に通ずる事發覺して幕吏に捕へられ大阪の獄に投ぜらる翌慶應元年乙丑五月十二日獄中に歿す年五十墓は茶臼山邦福寺にあり

清水中洲

名は原字は士進中洲と號す通稱彌三郎仙臺藩大阪邸の處守なり中井履軒に學ぶ慶應三年丁卯二月九日歿年七十八墓は下寺町大蓮寺に在り著述詳ならず其詩一首を抄出す

本願寺觀垂絲海棠

寶殿花開春色新、賞觀難去幾呻吟、奔波翁媼不知趣、認得乃爲宗旨人、